

堀金村の埋蔵文化財第2集

ほりがねしょうがっこうふきんいせき  
**堀金小学校付近遺跡**

—小学校の下に埋もれていた平安時代のムラー



2005. 9

堀金村教育委員会

ほりがねしょうがっこうふきんいせき  
堀金小学校付近遺跡

## 埋蔵文化財発掘調査報告書



—小学校の下に埋れていた平安時代のムラー

2005. 9

堀金村教育委員会

## ご あ い さ つ

この報告書は平成15年から17年にかけて進めました堀金小学校の全面改築に伴いその敷地内になります範囲の埋蔵文化財の発掘調査をした結果をまとめたものであります。

学校建設の予定地の近くで十ヶ堰を挟んだ東側にはかつて水田の構造改善に伴って発見された「岩田天神遺跡」があります。

そのためにこの地域にも昔の人々の生活の跡が残されているかもしれないという予想のもとに、長野県立歴史館の百瀬新治先生(現読書小校長)・堀金中学校の寺島俊郎先生(現八坂中教諭)・松本市梓川の山田瑞穂先生のご指導を頂きそれに多くの協力者の力をお借りして予定地の全面発掘をいたしました。

その結果、近くの岩田天神跡と同じ時代で今から1000年ほど前、平安時代末期に人が生活していたと思われる家の跡と使っていた器などが出てきました。そのためこの地域を「堀金小学校付近遺跡」と名前を付けました。

現在子どもたちが遊んだり勉強したりしているこの同じ大地に1000年も昔の人々が同じ常念岳や山並を見ながら一生懸命考えたり働いたりにぎやかに話し合っていたらうと想像すると新たな夢とロマンが広がります。

この報告書は百瀬先生と寺島先生が小中学生や一般の私たちにも分かりやすく書いてくださいました。ぜひお読みいただいて私たちの郷土の歴史とその素晴らしさを知ったり、再確認をしていただけたらありがたいと思います。

最後になりましたが、発掘調査の実施と報告書の作成に当たり、きわめて限られた時間と経費の中で献身的にご協力とご指導をいただきました三人の先生方、そして酷暑の夏に耐えて発掘に従事されました協力者の皆様、また県の担当者を始め連携して業務を進めていただきました事業所や作業員の方々に心より感謝とお礼を申し上げまして発刊のごあいさつといたします。



8号住居出土墨書土氏器「氏口？」

平成17年8月

堀金村教育委員会  
教育長 小平 信夫

## 目次

ごあいさつ

目次・例言

第1章 遺跡の位置	5
どんな場所に遺跡があったの？	6
堀金村の古い歴史はどうだったの？	8
第2章 学校の下に埋もれていた平安時代のムラ	12
どうして地中深いところに遺跡があったの？	13
調査でどんなものが出てきたの？	15
どんな家に住みどんな道具を使っていたの？	17
ムラの生活はどのようなようだったの？	41
第3章 調査の結果と問題点	45
調査をしてどんなことがわかったの？	46
まだわからないことや新たな疑問は何？	47
第4章 調査の経過	48
どうして調査をするようになったの？	48
堀金小学校付近遺跡はこれからどうなるの？	52
報告書抄録	

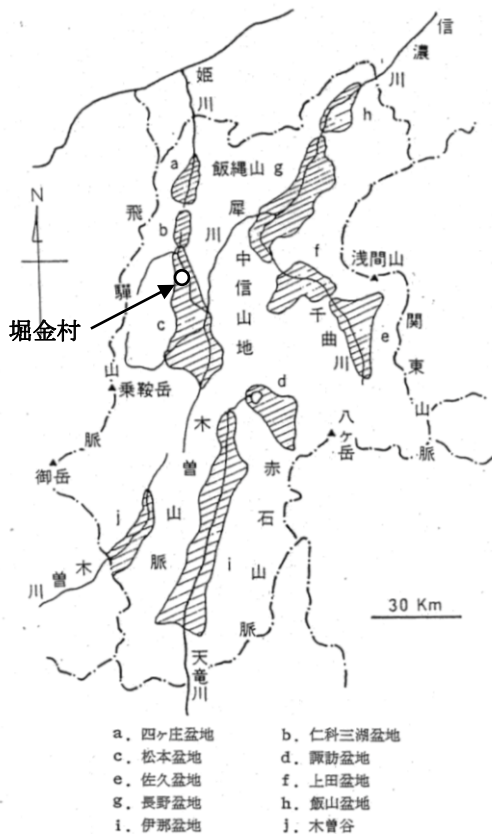
## 例言

- この本は、堀金小学校を建てかえるにあたり発掘調査した堀金小学校付近遺跡の報告書です。
- 堀金小学校付近遺跡は、今まで知られていなかった岩田天神南遺跡を含む範囲を、新しく堀金村教育委員会で遺跡と認めこのような名前をつけました。(堀金村烏川3000番地ほかに位置します)
- 発掘調査は、堀金村教育委員会がいろいろな方の協力を受けて実施しました。
- 発掘調査は山田瑞穂・百瀬新治・寺島俊郎の3人の先生が中心になりました。
- 発掘調査は、平成15年9月から17年4月まで、工事の進み具合に合わせて7回に分けて実施しました。
- 調査の整理と報告書の作成は、17年4月以後、教育委員会と百瀬・寺島両先生が進めました。
- 写真の撮影には、中澤義直・清澤朝男両先生の協力をいただきました。
- 発掘調査で得た資料や諸記録・図書類等は、堀金村教育委員会で保管していますので、ご利用ください。
- この報告書は、遺跡の上で生活をしている堀金小学校の児童のみなさんに遺跡のことを理解していただくことを大事に考えて作成しました。そのため、専門に研究しておられる方にはやや不十分な部分があります。さらに調べたいことや疑問点などは、教育委員会や3人の先生方に直接お聞きください。
- この発掘調査を実施するにあたりまして多くの機関・個人の方々よりさまざまなご協力をいただきました。心より感謝とお礼を申し上げます。

# 第1章 いせき 遺跡の位置

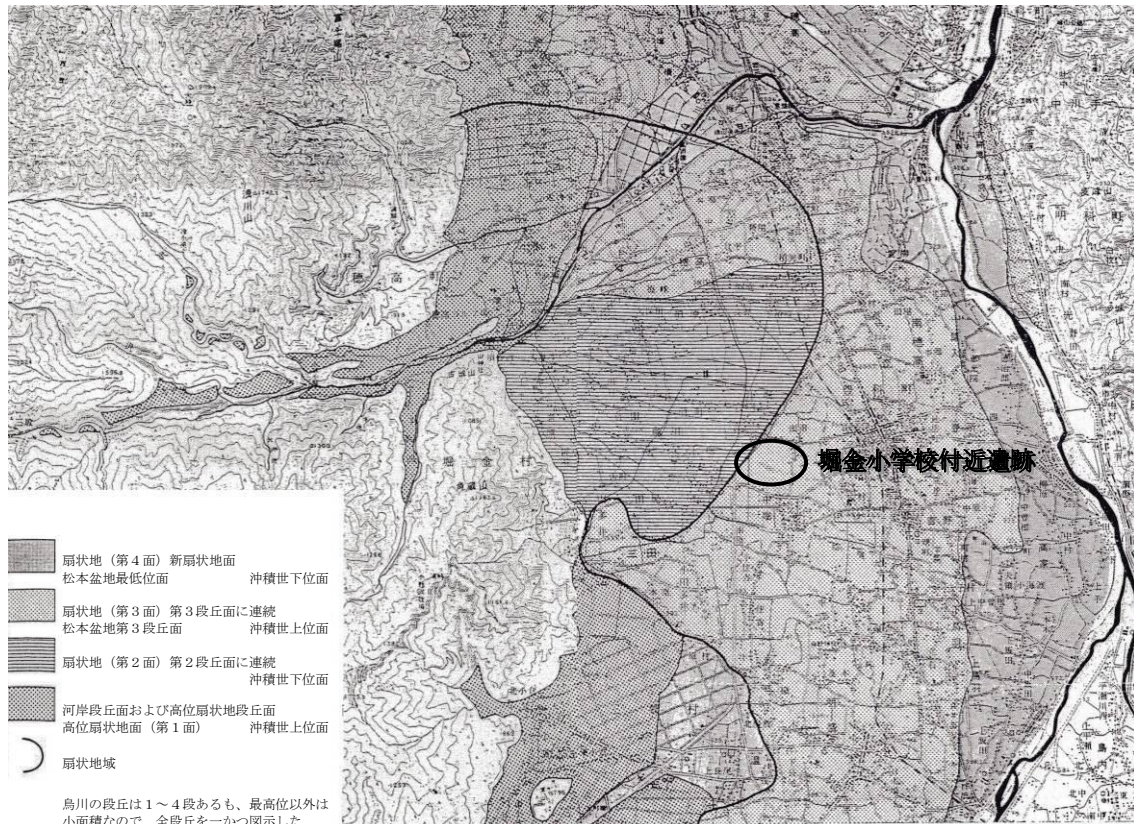


堀金村望遠（東より常念岳を望む）



長野県は、日本のほぼ中心にあり、「日本の屋根」とよばれるほど高い山々に囲まれています。堀金村は、そのなかで岐阜県との境に近い県の西側に位置し、有名な日本アルプス常念岳の東山麓にひらけた農村です。烏川などの川が運んだ土砂によってできた、広く平らな土地には、千年以上も前から人間が住み、今の堀金村のもとをつくってきました。堀金小学校の下には、今の堀金村に続く最初のムラの跡(遺跡)が残されているのです。最初のムラができたころは、どのような場所だったのでしょうか。古い時代の堀金村はどのような歴史があったのでしょうか。

## どんな場所に遺跡があったの？



遺跡のまわりの地形 (堀金村誌より)

堀金村の地形は、北アルプスに含まれる山地の部分(西側)と、松本盆地に含まれる平坦な部分(東側)に大きく分けることができます。堀金小学校から西をながめると、ゆるやかな傾斜になって西に上っていくのが観察できます。また、北側の岩原須砂渡方面と、南の田多井から三郷村境にかけてが、小高く盛り上がっていることもわかります。

今から何万年か前の時代、いろいろな方向に流れていた烏川が、堀金小学校の方向に流れ下っていたことがありました。洪水のたびに岩や砂がたくさん運ばれてきて、倉田や扇町に厚く積もりました。それが、一番厚く高く積もった烏川の出口である須砂渡を中心として、上から見た形が、ちょうど半円形あるいは扇形にみえることから、このような地形を扇状地といいます。同じように、田多井の南に見えているのは、黒沢川がつくった扇状地なのです。

また、学校から東を見ると、十ヶ堰が西から北へと大きく流れを変えています。北へ流れていくのと方向を合わせるように、巾とよばれる崖のような地形が下堀の方向に続きます。これは、もっと古い時期に、この付近を梓川が北に向かって流れていて、その時にできた崖(河岸段丘)だということです。堀金小学校付近遺跡は、この巾(崖)をはさんで両側に大きくひろがっています。

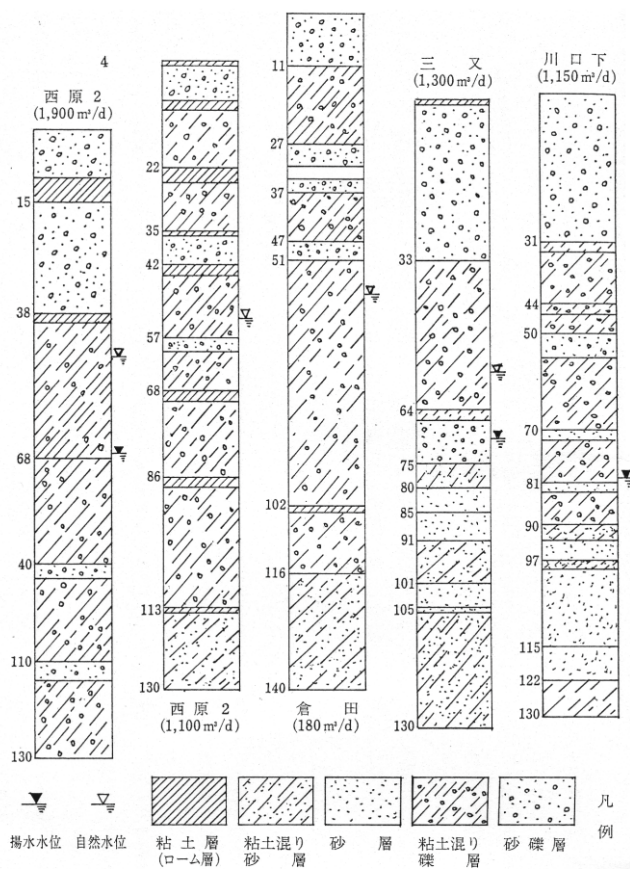
堀金小学校から田尻・田多井にかけては、二つの扇状地に挟まれて低くなっていて、その部分を沢が流れ下っています。その1本が小学校の南を東に流れる深沢です。おそらくこの深沢のほとりに営まれた集落(ムラ)がこの遺跡なのです。十ヶ堰は、ムラが営まれた時代よりずっと後、江戸時代になってからつくられた用水路です。学校のまわりに水田がひろがる現在の風景は、十ヶ堰が通じた後のごく最近のできごとといえます。

このように、現代とはずいぶん違った風景のなかだったと考えられますが、川によってつくられた比較的平坦な地形の上に、かなり広くムラが営まれていたのです。

どうしてこのようなことがわかるかという、現在地表に見えている地形をヒントに考えると、地中深くに穴を掘って地層のようすなどを調査する(ボーリング調査)方法があります。昭和40年代に調査された結果が柱状図に示されています。

それによると、大きく3つの地層にわけることができるそうです。現在の地面から30~40メートルまでは、丸い石と砂が混ざった層で、その中に火山灰のうすい層(ローム層)がはさまったりしています。その下100メートル付近までは、粘土混じりの厚い層に石や砂の層が入っています。この層のところに地下水が流れていて、それが穂高町などでわき水となります。もっと下になると、ふたたび砂や石が多く含まれる層になります。おそらくさらに下、数百メートルの位置に松本盆地を支えるようにある固い岩があると考えられています。

このような地層のようすから、堀金小学校付近が長い間の川による石や砂・土の積み重ねで現在の地形になったことが明らかになったのです。



堀金村ボーリング柱状図

## 堀金村の古い歴史はどうだったの？

現在、小学校の周りには広々とした水田が遠くまで見渡せます。しかし、ずっと昔からこのような風景が広がっていたわけではありません。千年以上もの長い間、村に住んだ人たちが土地を耕し続けるなどいろいろな努力をしてきた結果なのです。現在、村のあちこちに昔の生活の跡(遺跡)があります。次のページに示したように、ずいぶん多くの遺跡が見つかっています。そこでは、土の中に家やお墓をつくった跡(遺構)や使って残された道具など(遺物)が残され、当時の生活を知るヒントを与えてくれます。

これから、堀金村のずっと古いころの人々のくらしぶりはどうだったのかを、土の中に残されている物を手がかりにみてみます。堀金村で一番古い生活の跡は今から約8000年前と考えられます。堀金小学校付近遺跡でムラが営まれていたのは、今から約1000前の時期です。この7000年の間に、村ではどのようなできごとがあったのでしょうか。

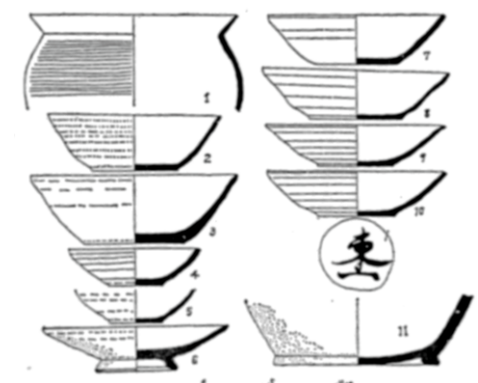
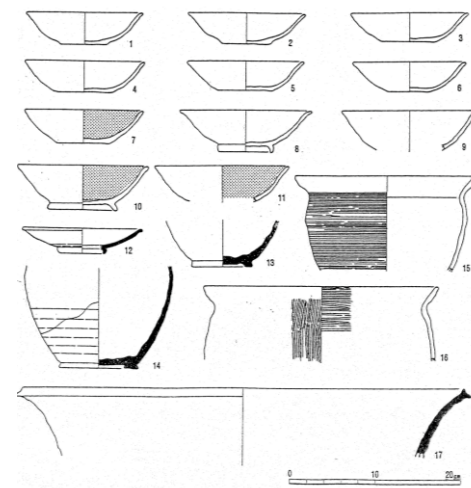
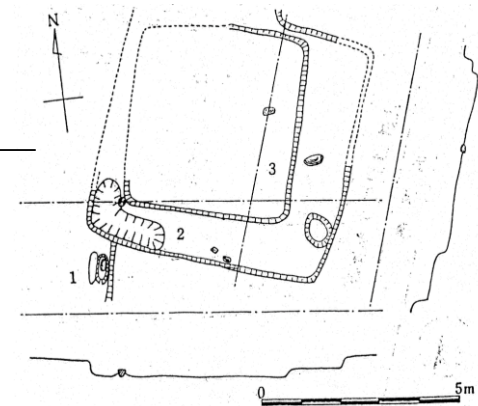
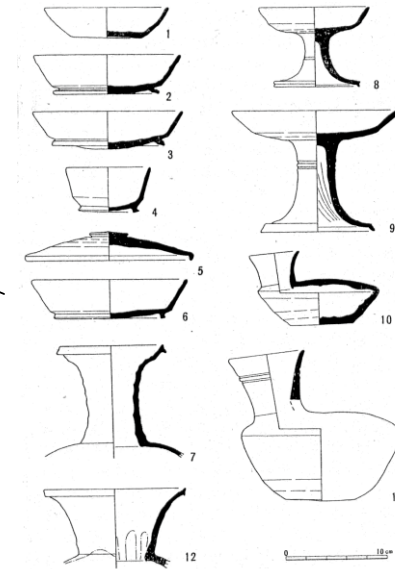
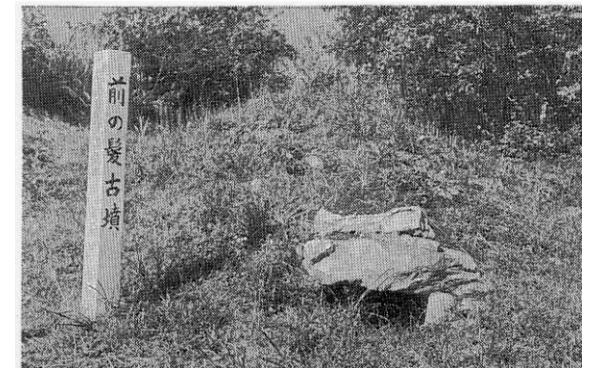
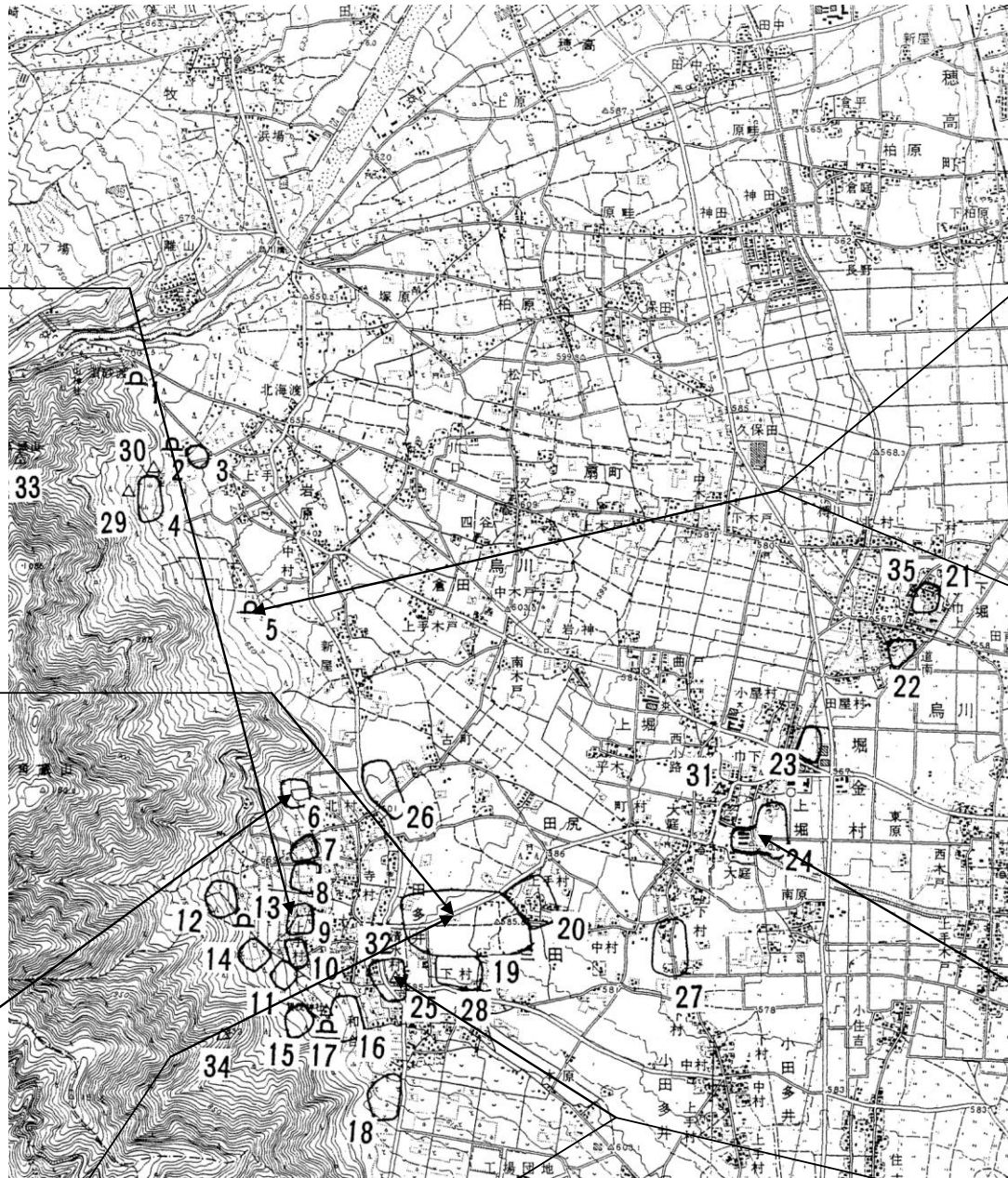
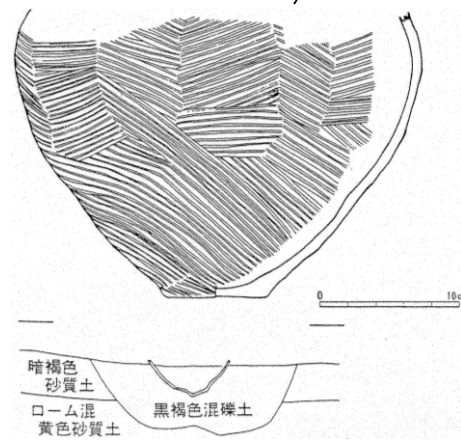
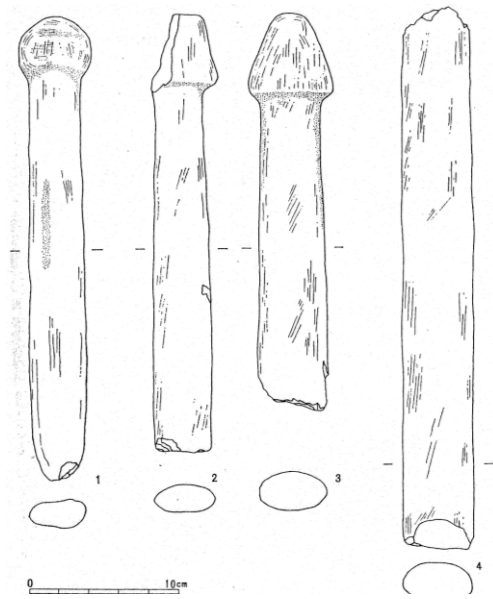
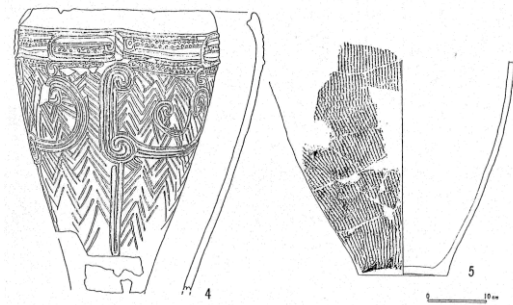
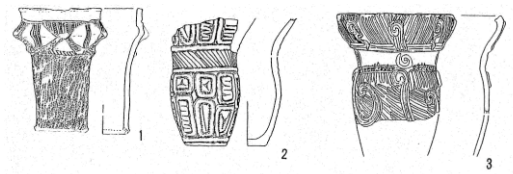
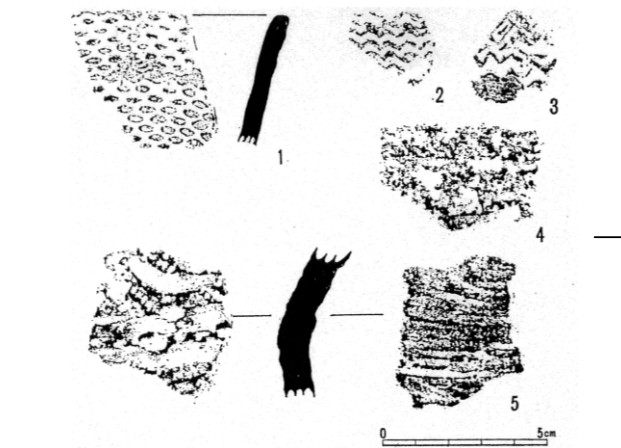
今から約8000年前、堀金の地に初めて人間の生活の姿が確認できます。田多井やそこから山に入った牛首沢などで、そのころの土でつくった入れ物(土器)のかけらが発見されているのです。しかし、わずかな土器だけで、家などは見つかっていません。村に住んだのか、たまたま通りかかったのか、残念ながら今のところわかっていません。また、それよりも古い何万年前という時代は、石の道具が中心で土器はまだつくられていません。穂高町などでは、こんな古い時代の石の道具が発見されています。堀金村にも古い時代の土や石の道具、そして住んだ家の跡などが発見されないまま眠っている可能性があります。ぜひ、ちょっと地面に目を配って、堀金村のうんと古い時代を明らかにする物を見つけてください。

番号	遺跡・史跡名	時代	番号	遺跡・史跡名	時代
1	須砂渡口南古墳	古墳	18	和合田遺跡	縄文
2	岩原古墳	古墳	19	そり表遺跡	縄文・弥生・古代・中世
3	岩原遺跡	古代	20	なかじま遺跡	縄文・古代
4	巾上遺跡	縄文・弥生・中世	21	十兵衛屋敷遺跡	中世・近世
5	前の髪古墳	古墳	22	下堀道南遺跡	古代
6	山の神下遺跡	縄文	23	大妻(農協前)遺跡	縄文・古代
7	おもそう遺跡	縄文・弥生・古代	24	堀金小学校付近遺跡	古代
8	上手林遺跡	縄文	25	田多井古城下遺跡	縄文・古代・中世
9	石見堂遺跡	縄文	26	田多井北村遺跡	縄文・古代・中世
10	上の原B遺跡	縄文	27	堀の内遺跡	古代・中世・近世
11	上の原C遺跡	縄文	28	深沢南遺跡	縄文・古代
12	曲尾遺跡	縄文・古代	29	安楽寺跡	近世
13	曲尾古墳群	古墳	30	大同寺跡	近世
14	牢窪遺跡	縄文・弥生	31	上堀堀屋敷跡	近世
15	神沢遺跡	縄文	32	田多井氏居館址	近世
16	加茂神社南遺跡	縄文・弥生	33	岩原城址	近世
17	古城下古墳	古墳	34	田多井城址	近世
			35	十兵衛屋敷跡	近世

堀金村の遺跡・史跡一覧表



堀金村に残る古い時代の遺跡





今から5000年ほど前になると、岩原から田多井・田尻の山ぞいに、いくつかのムラ(集落)がつくられます。ムラ全体を調査できていませんので、三郷村で発掘された例をもとにした想定ですが、2～3軒から10軒くらいでまとまってムラを営んだようです。周りの野山から食料を手に入れていて、まだしっかりとした水田や畑による農業はされていません。しかし、動物・昆虫・山菜・木の実・きのこなど、あらゆるものを食べ物として利用し、その数は何百という多さでした。特に秋になると大量に収穫することのできる木の実、ムラの周りを焼き払いそこに種をまいて育て、安定した食料を確保していました。ただし、木の実には火を通さないとうまく栄養にできなかつたり、苦みを除くためにゆでなければなりません。それに使われたのが大量の土器でした。土器には独特のもようがつけられ、縄文式土器とよばれています。また、この土器が使われた今から約13000年前から2500年くらい前までの時代を縄文時代と言っています。

木の実など自然にたよる生活を続けてきた日本に、稲作を中心とした農業と金属の道具を使用する新しい文化が、中国大陸の方から北九州に入ってきました。遠い九州から長野県に文化が及ぶまでに少し時間がかかりましたが、今から2000年前ころ、本格的に新しい文化がもたらされました。田尻からは、新しい文化が入ってきたころの土器が見つかっています。おそらくお墓に使われた土器ですが、縄文式土器に比べてもようが少なくなります。この土器を弥生式土器とよび、今から約2500年前から1800年前を弥生時代と言っています。土器以外の物が発見されませんのでよくわかりませんが、田尻の小川のほとりではいったいどのような生活がされていたのでしょうか。

同じく岩原から田多井にかけて、こんもりと土を盛り上げたお墓がいくつか発見されています。小高い場所を選び、石で葬る人を入れる部屋をつくってその上に円形に土をかけたお墓で、古墳とよばれています。おそらく、ふもとのムラの少し力のある人を葬ったのでしょう。今から約1300前、穂高町ではたくさんの古墳がつくられますが、南の堀金でも、墓に葬られた人を中心に村が営まれていたのです。

堀金小学校のところにムラがつくられる今から1000年ほど前、上堀・下堀・岩原・田多井と村のいろいろな場所にムラ(集落)がつくられるようになり、今の堀金村のもとができあがりつつありました。この時代は、遠く京都の都では貴族が栄え、県庁(国府)は松本にありました。お隣の豊科町や三郷村を含め、新しい開発が始められたのです。



田多井古城下遺跡出土の墨書土器

## 第2章 学校の下に埋もれていた平安時代のムラ



いせき  
遺跡風景(東より望む)



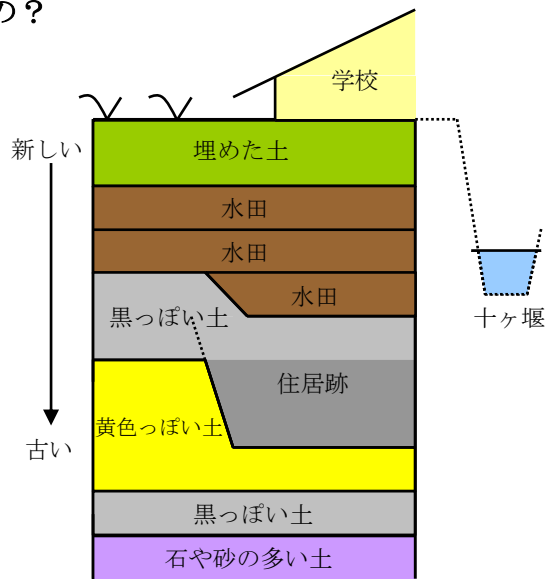
8号住居出土墨書土器(惣道寺?)

堀金小学校の地下1メートルほどの場所から、今から1000年位前の生活の跡が掘り出されました。いったいどのようなムラをつくり、どんな生活をし、その後どうなったのでしょうか。これから発掘された資料を中心にさぐってみましょう。

しかし、1000年という長い時間が経っています。家に使われていた木とか、木や紙で作られていた道具とか、食料としていた物など、ほとんどがくさってしまい残っていません。ただし、その人たちが掘った穴の跡や、たくさんの土・石・鉄で作った道具が出てきていますので、当時の生活の姿が実際のもので見えてきます。みなさんのご先祖かもしれない堀金村の先人たちのくらしぶりを、現代の自分たちの生活と比べてみるのもいいでしょう。

## どうして地中深いところに遺跡があったの？

堀金小学校の南側には、田多井の谷から深沢という川が流れ下っています。大雨の時などは、上流から土や石・砂が流されてきて、田の取り入れ口などにたまっているのを見た人も多いと思います。このような土や砂が、何十年・何百年という間に、だんだんと厚く積もっていきます。そして、大洪水や新しく水田とされるなど環境が変わるたびに、土の質も変わります。地面を横から注意深く観察すると、土が層になって変わるのがわかります。小学校の下の地面を観察して記録し、それを模式図にしてみました。



土層模式図

現在の小学校は、埋め立てられた土で覆われています。その下に、前に水田に使われていた土の層が2～3層出てきます。水田であったことがどうしてわかるかというと、土の質と床土とよばれる固くて色のちがった土が水平にたまっているからです。つまり、小学校の下は昔は水田であり、しかも2～3回大きさなどを変える田のつくり替えがされていたことがわかります。

その下の土の中に、今から約1000年前の家が出てきます。当時の家は、地面を掘りくぼめて穴のようにした、半分地下式の家だったのです。水田の下の土層から出てくるわけですから、積もった順序を考えると、水田よりも下の土にある家の方が古いことがわかります。家が使われなくなると、穴は埋められたり自然に埋まっていきます。その時、穴の中に入る土はまわりの土とちょっと違ったものになります。発掘調査では、この土の違いを観察し見つけたして、穴になっている家の跡をさがして掘るのです。

家が出てきた土の下に、縄文土器がわずかに混じる土の層があります。家はこの土を掘りこんでつくられているのですが、おそらく何千年という古い時代に積もった土です。さらにその下に、赤土とよばれる火山灰を主にした土があります。この土の中や下には、大きな石や砂の層があります。何万年以上も前、火山がさかんに噴火した時代があったり、大きな川がここを流れていたことがわかります。遺跡の位置のところで示したように、流れていた川は烏川や梓川でした。



土層のようす

このように、土の層のようすから、古い時代までの気候やそこでのできごとがわかるのです。また、小学校の地下1メートルで昔のムラの跡が見つかった理由を知ることのできるのです。

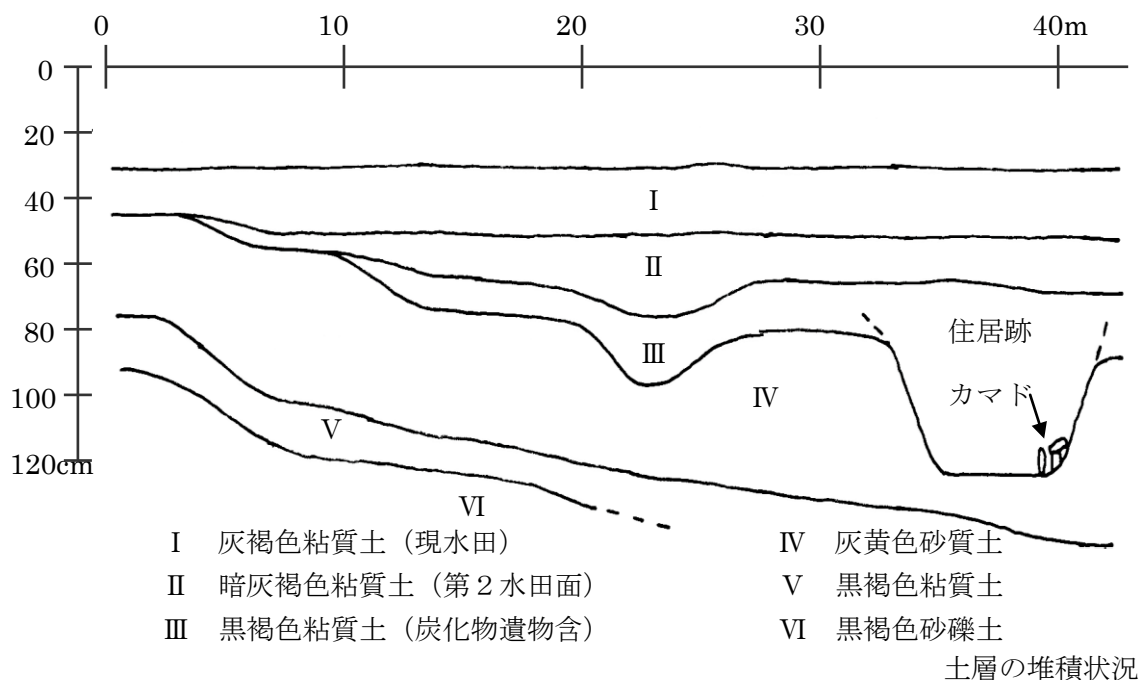
東西の方向から土の層をもう少し詳しく観察してみます。一番上には、現在の水田に使われている土が30センチメートルほどで水平に広がります。学校の下の部分では、この土の上に他の場所からの土砂を盛り土してあります。その下の層は、長い間水田として使われ、少しずつ土がたまってきたことわかる土の層があります。水を通さない床土とよばれる固くて鉄分などが集まった土があります。1年に1ミリメートルくらいずつの厚さで積み重なるといわれますが、その結果が15センチメートルの層となっています。

その下に、それより古い水田の層が2面みられます。いずれも床土が下に認められ、厚さは20センチメートル前後です。今の水田よりも小さい区画であったものを、大きくつくり直していることがわかります。また、石などが含まれない良い土の水田が多いという地元の方々の声を証明する、みごとな粘土質の層が続きます。

さらに下の層は、黒っぽい砂混じりの土で、木炭や土器の破片などが点々と見えています。無い場所もあるので、地面を平らにして水田をつくる時、削られたりしたと考えられます。平安時代の家や穴の中には、これと似た土が入っていました。おそらく、この土の上の部分に当時の地面があったのでしょう。

家を掘りこんでいる土は、黄色っぽい砂の層です。近くを流れた川の砂が、比較的短い時間で積もったと考えられます。川の流れのちがいに、場所によっては小砂利などの層もあります。その時期は縄文時代より古く、田多井や岩原で赤土とよばれる火山灰が降り積もっていた時に近いでしょう。

その下に、黒っぽい粘土質の土、さらに下に丸い石をたくさん含む層があります。1万年よりもっと古い時期、川の流れから離れた時期があり、それより古く川の本流が近くを流れた時期もあったことがわかります。このように、堀金小学校付近の昔のようすを教えてくださいるのが土の層なのです。



## 調査でどんなものが出てきたの？

遺跡は、今から約1000年前を中心とする平安時代のムラの跡です。京の都では貴族が華やかな生活をくり広げている時代です。しかし、都から遠く離れた信濃の国安曇郡では、ずっと昔の時代から相変わらず地面に穴を掘って住む家での生活が続いていました。税金なども重く苦しい生活ですから、家は小さくりっぱな家具などは持てません。しかし、その中でも工夫してたくましく生き抜いてきているのです。

この時代堀金につくられたムラの一つが地面の下に埋まっています。今度の調査で姿をあらわしました。ただし、木や紙でつくられた物や食べ物などは、長い年月でくさったりして今まで残りません。人々が地面に刻みこんだ建物などの跡と、石や土と鉄などで作った道具などが、発掘調査で出てくる主なものです。調査で発見されたものを具体的に示す前に、どのようなものが出てくるのかを説明しておきます。

ムラは何十という数の家でできています。家は地面を数十センチメートルから1メートル近くも掘りくぼめてつくるものと、柱穴を掘って地面の上あるいは床を張ってつくるものがありました。今回の調査では、家はすべて地面を掘ってつくられていました。ただし、地面の上につくられた建物は、後の人が水田をつくったりする中で壊されてしまい、現在は見つけることができなくなっている可能性もあります。大きさは3～5メートルで正方形に掘られているものが多くみられます。

柱は、家の中の床に据えるように立っていたらしく、柱穴がみられる家は少ない傾向があります。垂直に掘りこまれた壁を利用して、火を使って食事を作るカマドが石や土でつくられている家が一般的にみられます。カマドから家の外に煙突が伸びているのですが、家が使われなくなると壊されたりして、当時のままで残されているものはほとんどありません。同じように、家は使われなくなると埋められたりして後を水田などに利用しますから、当時の形や深さそのままに発見されるわけではありません。



半分掘られた8号住居

これらの家が発掘で出てくるのですが、区別し整理していくために、発見された順などで番号をつけていきます。今回の調査では、発見された順番で〇号住居として表しました。次からの、それぞれの家がどのようなものであったのかの説明では、家の位置や向き、形や大きさ、壁や床面の状態、カマドの位置やようす、家が使われなくなつてからの状況、道具の残され方、出土した物、などを観察し記録したことをもとに書いてあります。

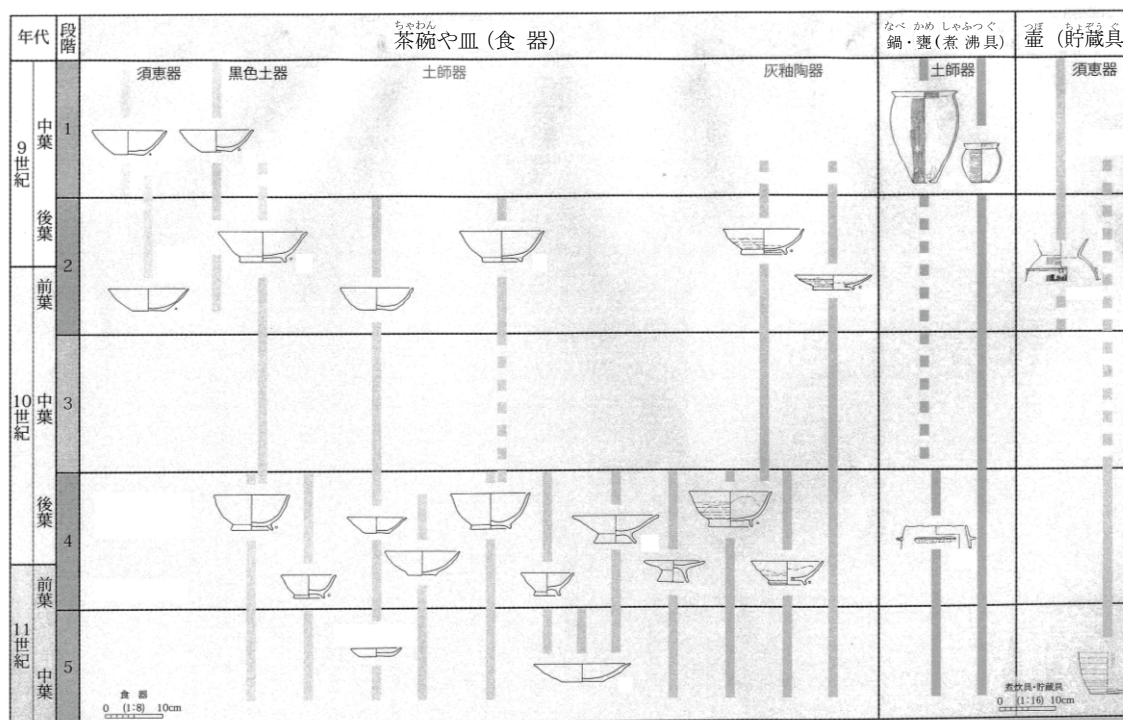
次は残されていた道具についてですが、今度の調査では、食器を中心にたくさんの道具類が見つかりました。種類別に当時の道具について解説します。

まず、土で作られた道具(土器)ですが、焼き方や粘土の異なる土師器、須恵器、灰釉陶器の3種類の土の器が出てきています。時期によって、形や種類はだんだん変わっていきます。土師器は縄文式土器などと同じ方法で焼かれている土器で、少し低い温度(約800℃)で焼かれています。粘土だけで作るので水もれが起こりやすく、それを防ぐために内面に細かい炭の粉をすり込んで磨いた黒色土器もあります。須恵器は窯を用いて高温(約1100℃)で焼いた器です。灰色をしていて、固く焼きしめられています。灰釉陶器も窯を使って作られますが、表面に釉薬をかけてさらに高い温度(約1200℃以上)で焼かれていて、白くつやつや輝いています。

土でつくられた道具のほとんどは、食器や食事をつくる道具として使われました。お碗やお皿など食事を盛る道具、食物を煮たりする現在の釜や土鍋の役割をした甕や水などを入れる壺などの種類があります。作り方は、碗や皿などの食器はロクロで作られます。小型の甕や壺は粘土ひもを積んで形を作り、仕上げにロクロを使います。大型の甕や壺も粘土ひもを積み、板などでなでたり、たたいたりして形を整えていきます。松本平で使われる土師器の甕は板でなでたときに上下に細かい線がたくさんつくのが特徴です。

鉄の道具がいくつか見つかっています。それまでの石の道具はほとんど使われなくなり、木を切り削ったりする時や土を耕す時などには、鉄でできた道具が使われました。今度の調査では、鎌や小刀などの道具が発見されました。

木の道具はたくさん使われていたのですが残りにくく、今回は見つかりませんでした。



土でつくられた道具(三郷村三角原遺跡報告書より一部表記を変更)

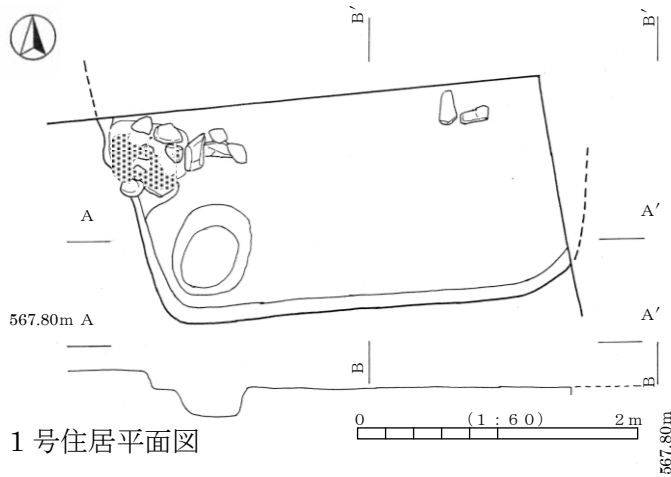


## どんな家に住みどんな道具を使っていたの？

### < 1号住居 >

この家は、一番最初に試し掘りの溝を掘った時発見されました。そのため、家の北側から東側にかけての大部分が調査の溝で破壊されてしまい、家の大きさや形を正確につかむことができません。調査した範囲では、家は北東の隅に位置していました。また、2号住居と近い距離で隣り合っていましたが、つくられた時期が大きく離れているので同時に存在したわけではありません。家の中の土は、いろいろな土が固まりで入っていますが、全体としては同じ土の層で、人の手で埋め戻されたと思われます。

家の形と規模は、南西と南東の隅がかりでわかりましたが、残りの2隅が破壊されてしまいましたので、はっきりとしません。残された南側の壁のようすやカマドの位置から、一辺が3.5メートル以上の四角い形をしていたと考えられます。床はほぼ平で、中央がやや固く踏みしめられている感じがありましたが、周りの方はやわらかくやや高くなっていました。また、床面の上には、炭や焼けた土が残っていました。



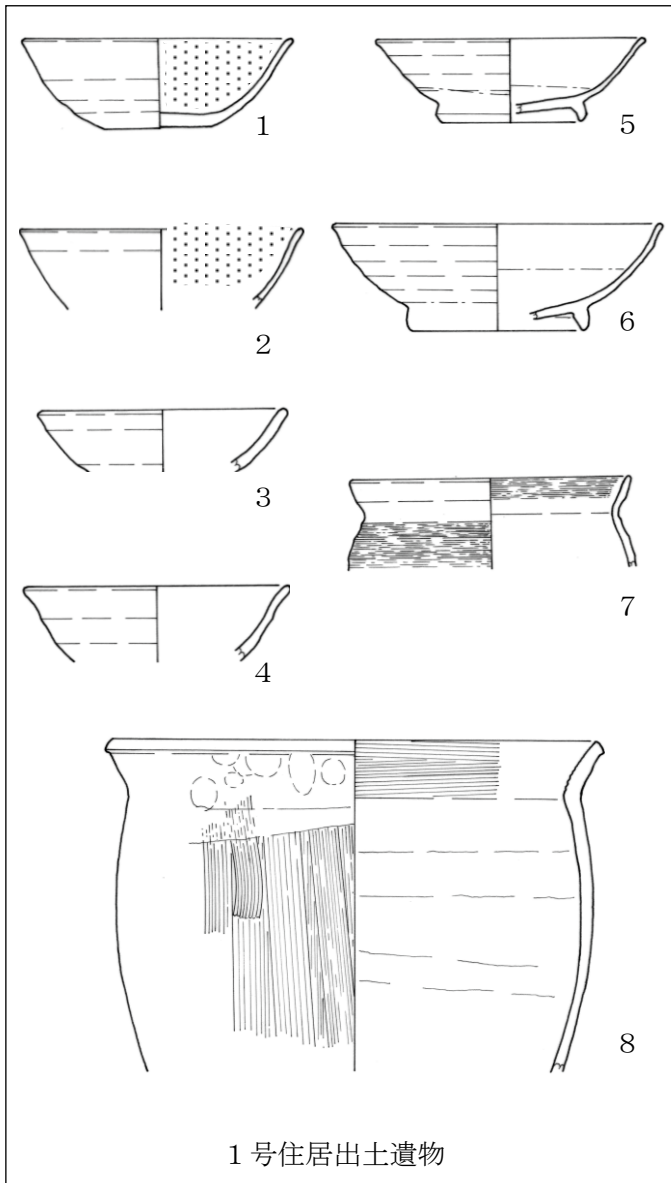
1号住居平面図

床に柱穴などは掘られていませんが、南西隅に焼け土や土器片の入った直径50センチ深さ20センチメートルほどの穴が掘られていました。壁は15センチメートルほどしか残されていませんが、急な角度で掘りこまれていたことがわかります。

西側の壁にカマドがつくられています。これもかなり壊れていますが、焚き口をはさんで両側に2個ずつ石が置かれており、この石を芯にして粘土でこしらえたカマドであることがわかります。火床(カマドの中の火を焚いた所の土床部分)はわずかに掘りくぼめられており、焼け土が残っていました。火床の中央に、四角柱の形をした石が埋められて立っていました。カマドに置かれた土器を支える働きをした石と考えられます。



1号住居完掘状況



カマド周辺に土器や陶器が多く残されていました。その中にはほぼ完全な形のものもあります。いっしょに多くの石や炭があることは、埋め戻される時にカマドを壊したりごみのようなものを焚いたりしたなごりでしょう。

見つかった土器はあまり多くはありませんでした。食器ではお椀が多く、焼き物の種類では黒色土器(1・2)、土師器(3・4)、灰釉陶器(5・6)などありました。土鍋の甕(8)と小型の甕(7)がありました。貯蔵具では須恵器の甕や壺の破片も出土しました。

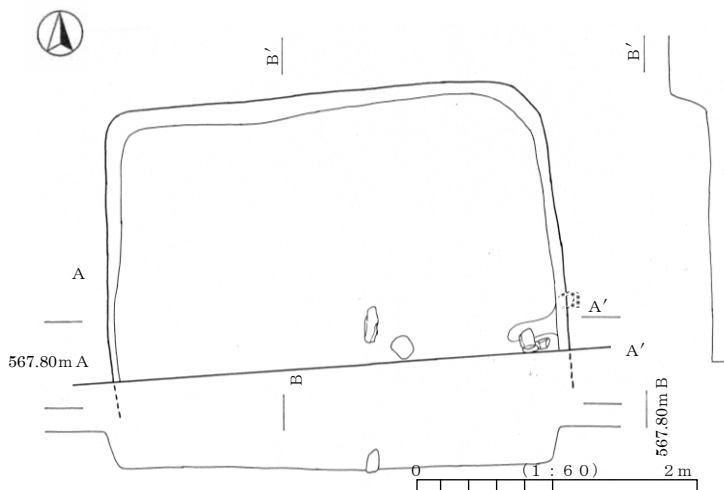
土器の形やつくり方を16ページの図にあてはめてみると、時代による特徴から、この住居は9世紀(800年代)の後半(段階2)につくられたものと考えられます。



### < 2号住居 >

1号住居と同じく試し掘りの溝を掘り進めていく途中で発見され、家の南側が破壊されてしまいました。西側の4号住居と約2メートル離れていて、ほぼ東西方向を向く家の向きや家の建てられた時期が一致するので、2軒は同じ時期に建っていた可能性が高いのです。家の中の土は、壁の近くに自然に埋まったと考えられる層がみられ、少なくとも壁や床に近い部分はある時間を経て埋まっていったと思われます。ただし、中央部分を中心に、1号住居などと共通する埋められたと考えられる土が上に乗っていました。また、埋められた土の中に黄色い火山灰を含む掘り上げた土が混ざっているのは、他の家と共通することです。

家の半分以上が残っていますので、規模や形がほぼわかります。1号住居と同じく一辺が3.5メートル以上の四角い形をしており、東壁の中央南寄りにカマドがつくられています。床面はほぼ平らですが、全体として固い面はありませんでした。



2号住居平面図



2号住居完掘状況

床面のすぐ上は先ほどの埋まってしまった土がみられ、所々にカマドに使われたであろう焼けた石が残されていました。

壁が30センチメートル程度残っていて、ほぼ垂直に掘りこまれていたことがわかります。柱穴を含めて、床に掘りこまれたものは認められませんでした。

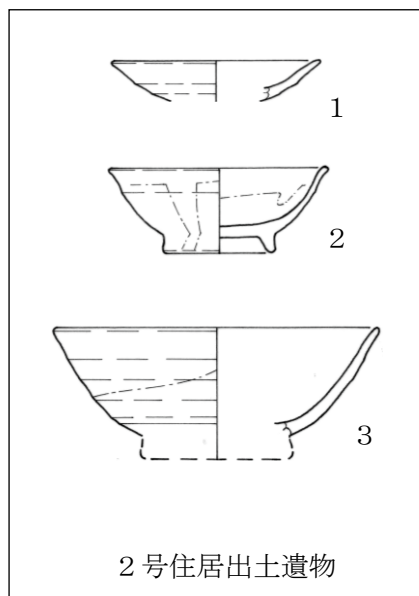
カマドも南側半分が壊れてしまっていて、その全体を明かにすることはできません。

1号住居と同じように、比較的大きな石を2個程度芯にしてカマドをつくったことと、火床に炭や灰が残されていたこと、周囲から土器などが多く出てきていることなどがわかりました。

カマド周辺とともに、埋められた土の一番下に  
ほぼ完全な形の陶器がみられました。

見つかった土器は少でした。食器ではお椀が  
多く、焼き物の種類で灰釉陶器(3)と小型の椀(2)、  
土師器(1)、黒色土器などの破片もありました。土  
鍋の甕も見つかりましたが、小さな破片でした。

土器の形から、この住居 1 1 世紀(1000 年代)  
の前半(段階 4)につくられたものと考えられます。

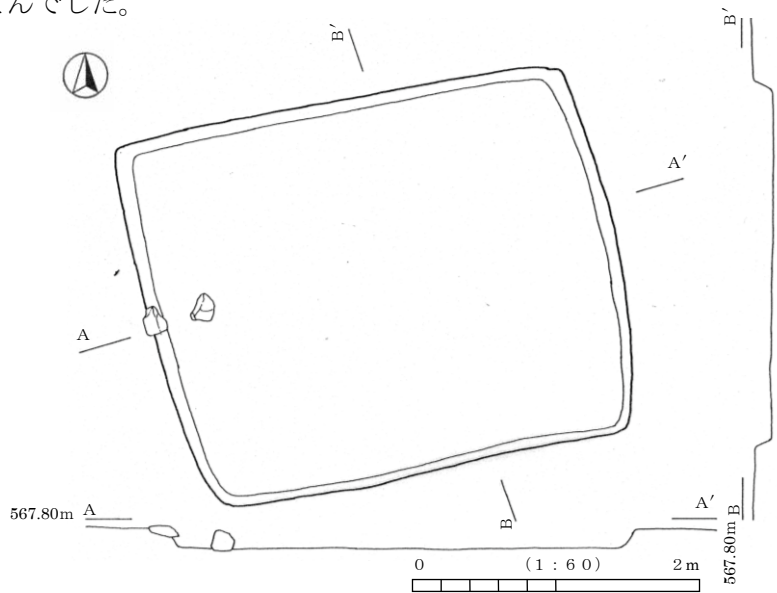


< 3号住居 >

1号住居の南西に位置し、家の中に入っていた土に炭や焼け土が非常にたくさん残されていたために、位置や形がはっきりとして発見されました。家の向きは、9・10号住居などと同じく南北方向よりもやや北側に向いています。

ほぼ正方形に一辺約3メートルに掘りこまれており、この遺跡<sup>いせき</sup>で発見された家のなかでは小さな規模です。カマドのある規模の大きな家よりも浅く掘られているのが特徴<sup>とくちょう</sup>です。床面はほぼ平らですが、全体としてやわらかく、床面上には柱状の木材をはじめ大小さまざまな炭と焼け土が層のように残されていました。炭となって発見された木材や植物の種類を、豊科町の森義直先生に調べていただきました。おそらく柱などの建築材料に用いたと考えられる、ヒノキ・サワラ・クヌギの枝が木炭の状態でありました。屋根あるいは壁<sup>かべ</sup>や床に使われた可能性のある、ヨシ(アシ)のくきや葉が見つかりました。家の中に入っていた土は1号住居などと同じ、いろいろな土が混じった埋められた土<sup>うめ</sup>です。柱穴など床を掘りくぼめたものはありませんでした。

西側の壁中央付近に、20センチメートル程度の大きさの石が2個置かれるようがありました。他に石がほとんど見つからないので、カマドに使われていた石の一部の可能性もありますが、カマドがあったと明らかにできるものはありません。土器などの道具はほとんど残されていません。



3号住居平面図



3号住居完掘状況

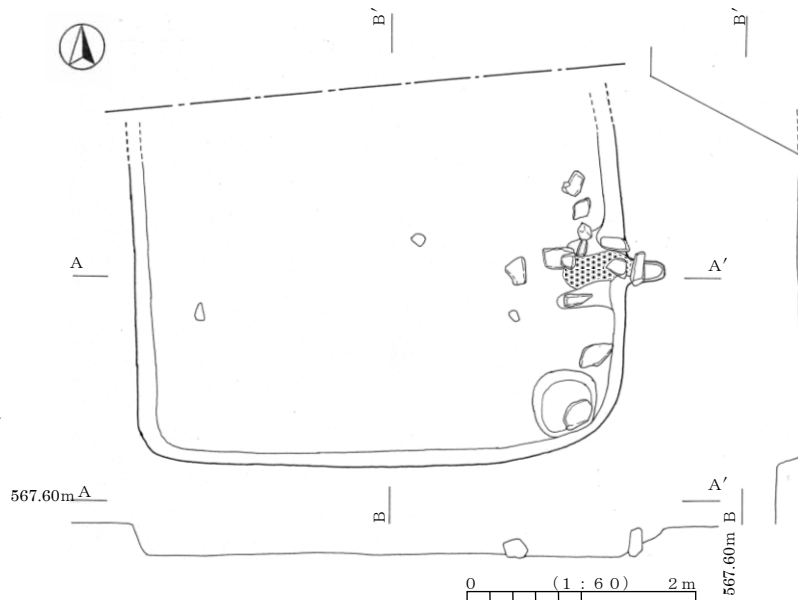
< 4号住居 >

2号住居の西側に位置し、5号住居を切り取るように新しくつくられた家です。平面的には、5号住居と接しているように見えますが、建っていた時期にちがいがあります。2号住居とほぼ東西方向の家の向きや東側ほぼ中央に位置するカマドに共通点があります。家の北側は、流れている用水路のために調査ができませんでした。家の中の土は、黄色い土や炭などが混じった同じ性質の土の層が続き、埋められたことがわかります。

大きさは一辺約4メートルでほぼ正方形に掘られた家と考えられます。床面はほぼ平らで、中央部特にカマド付近が非常に固く踏みしめられていました。南東隅の壁ぎわには、1号住居と似た焼け土や土器片が入った直径約50センチメートル深さ20センチメートルの穴が掘られています。床面には、それ以外に柱穴などは認められませんでした。壁は深いところで30センチメートルほどの深さがあり、やや斜めに掘られていることがわかりました。

カマドは東壁を掘りこむようにつくられており、1号住居などと同じく1～2個の石を芯にして、粘土でつくるタイプです。火床はわずかに掘りくぼめてあり、火を受けて焼けているようすがわかりました。その奥は煙出しの煙突につながる穴状になっていて、石が1つ上の面を支えるように置かれているのが確認できました。しかし、他の家と同じく人の手で破壊されたりしく、きちんと残されている状態にはありませんでした。

カマド付近に食器の類の土器・陶器が完全な形に近く残されており、東壁カマドの北側からは鉄の道具が床に付くように発見されました。



4号住居平面図

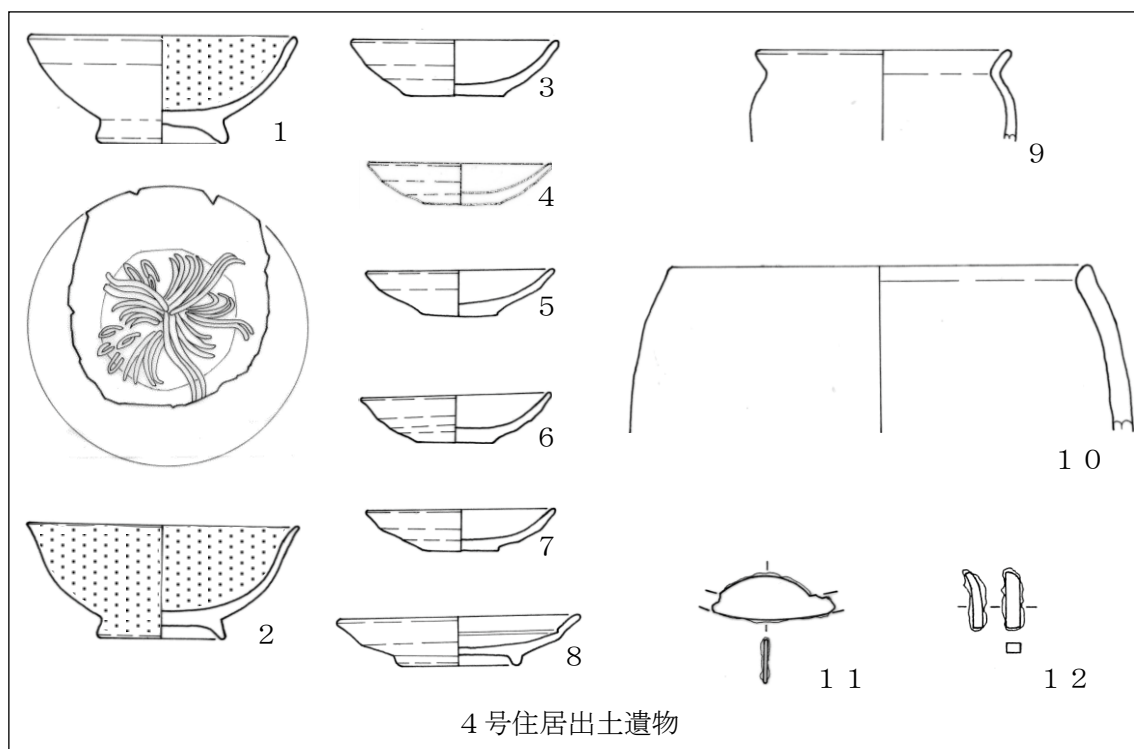


4号住居完掘状況

見つかった土器は少しでした。食器ではお椀が多く、黒色土器(1・2)。小型の椀では土師器(3)灰釉陶器の小さな破片がありました。皿では土師器(4～7)や灰釉陶器(8)がありました。土鍋では10のような釜のような形をしたものや小型の甕(9)が見つかりました。2は全面が黒色で内側の底には磨いたあとが模様になっています。5の皿の縁には油や煤がこびりついてたことから灯明皿(明かり取り)としてつかわれていたことがわかりました。

鉄の製品では、麻からせんいを取り出す板状の道具(苧引き金具)に似たもの(11)や棒状で割れ口が四角いもの(12)が見つかりました。

土器の形から、この住居は11世紀(1000年代)の中頃(段階4～5)につくられたものと考えられます。



### < 5号住居 >

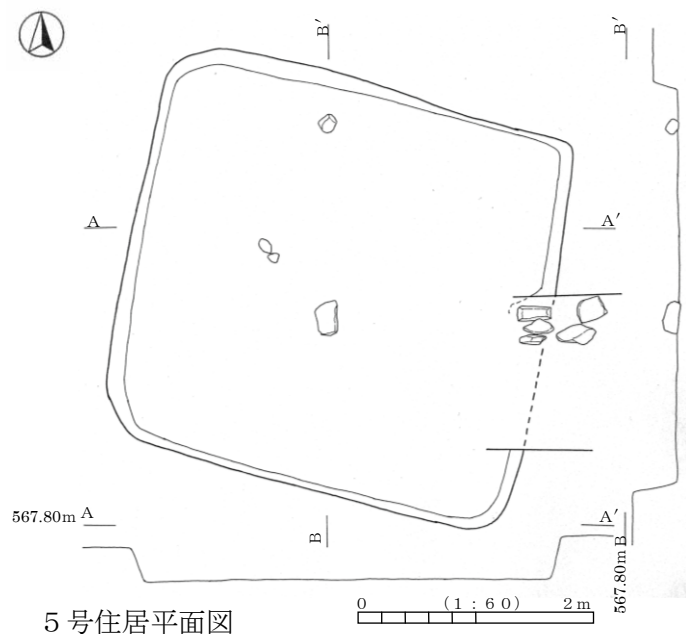
4号住居の西に接するように位置する家で、4号住居より古い時期に建てられたことがわかっています。家のほぼ中央を東西に試し掘りの溝が通ってしまい、東壁につくられたカマドなどが破壊されてしまいましたが、家の形や大きさは明らかにすることができました。家の向きは7号住居と同じく、東西方向やや南向きでした。中央部で床から約10センチメートル上まで壁ぎわはもっと深く、埋められた土があります。その上で3号住居に見られたように、柱や屋根など家の建築材料と考えられる木炭が厚さ2～3センチメートルの層となって発見されました。おそらく、半分埋めた状態でこれらの木材や屋根材を集めて燃やしたものと考えられます。その上には、やはり埋められたと思われる黄色い土の固まりが混じった土が積もっていました。

一辺が約4メートルのほぼ正方形につくられた家で、東側の壁ほぼ中央にカマドがありました。床はやや凹凸があるものの全体としては平らにつくられています。

東側のカマド付近から中央部にかけて床面が非常に固くしまっているようすが観察できました。柱穴など床面への掘りこみはまったく認められませんでした。壁は深いところで50センチメートルほどありますが、ほぼ垂直に掘りこまれているようすが観察できました。

カマドは試し掘りの溝でそのほとんどが破壊されてしまい、わずかに位置が確認できたのでした。火床に厚く焼け土が残っており、中央に2号住居と同じ支え石がありました。火床の両側に角張った石が1個ずつ立っており、いずれも表面が焼けてポロポロでした。1～2個程度の石を芯にしての粘土のカマドが予想されます。

木材などの炭層といっしょに、土器片などがいくつか入っているのが発見されました。それとともに大小の石も投げ入れられるようがありました。

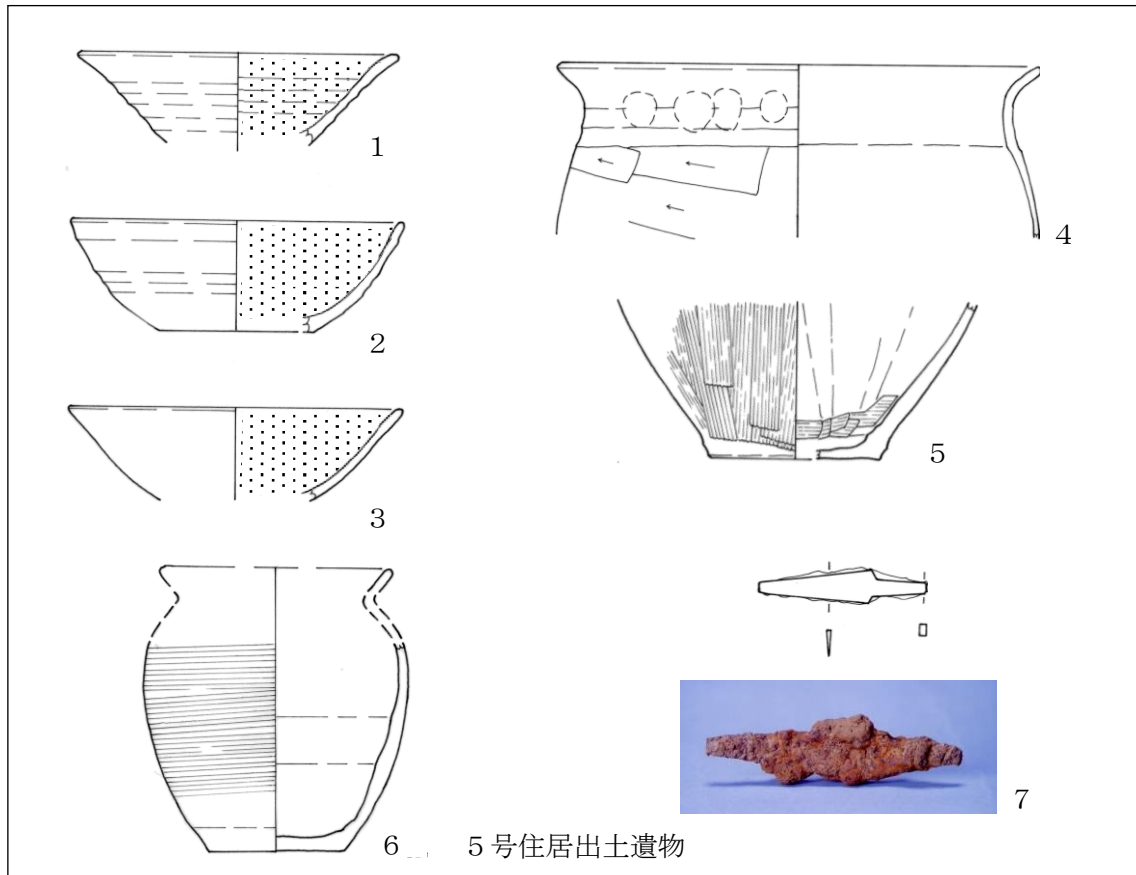


5号住居完掘状況



見つかった土器は少しでした。食器ではお椀が多く、黒色土器(1～3)や須恵器の小さな破片がありました。土鍋では5のような地元の甕と4のような佐久地方で使われていた甕(表面を薄く削ったもの)や小型の甕(6)も見つかりました。鉄の製品では、小刀(ナイフ、7)が見つかりました。

土器の特徴から、この住居は10世紀(900年代)の前半(段階2)につくられたものと考えられます。



試し掘りで破壊されたカマド付近

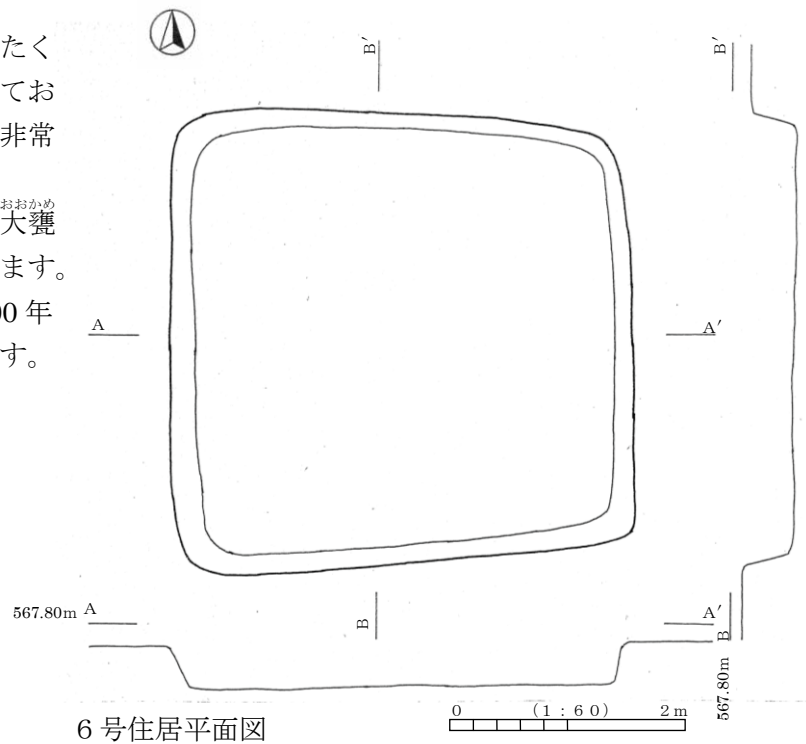
< 6号住居 >

4号住居の南側に位置して発見されました。家の規模・方向とカマドの無いことなど、3号住居と多くの共通点があります。家の向きはほぼ東西方向です。また、家の中の土は黄色の土が混じる一つの層になっていて、埋められたものでした。

一辺約3メートルと小さな規模の家で、カマドはつくられなかったようです。床は、砂や小石混じりの土の上であり、踏み固められたようすは確認できませんが、固く感じます。柱穴など床を掘りくぼめてある部分はありませんでした。3号住居と同じく、浅く掘りこんでつくられており、壁は10センチメートル程度しかありません。ほぼ垂直に掘られていたものと思われます。

土器などの道具はまったくといってよいほど残されておらず、焼け土や炭なども非常に少ない状況でした。

土鍋の破片と須恵器の大甕の破片のみが出土しています。破片からは9世紀代（800年代）のものと考えられます。



6号住居平面図



6号住居完掘状況

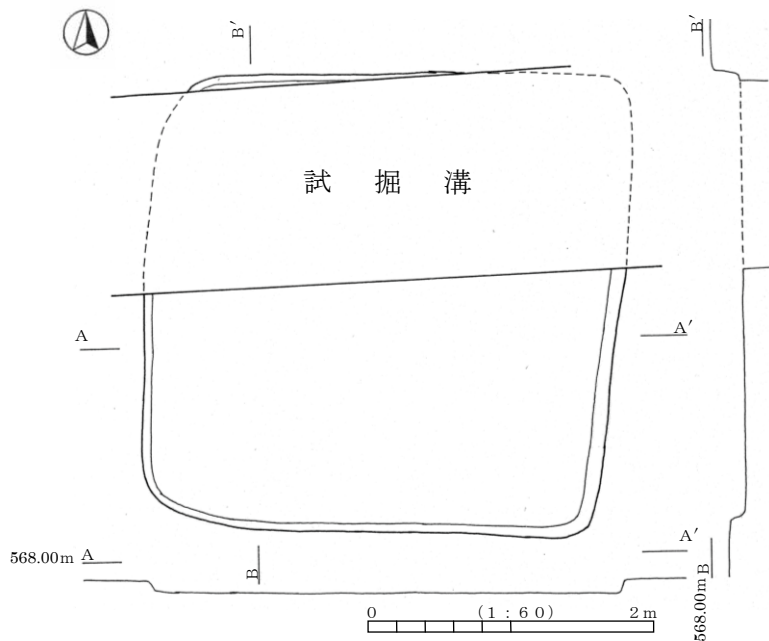
< 7号住居 >

8号・10号住居などとともに、遺跡の西側部分に位置しています。この家も試し掘りの溝のため北壁を含む北側部分が破壊されてしまいました。かろうじて、規模や形をはっきりさせることができます。家の方向は、東西からわずかに南に振れています。また、南北方向に小川などの古い流れの跡がありますが、それを切つて家がつくられています。6号住居などと同じくカマドの無い規模の小さな家です。家の中の土の状態からは、他の家と同じように埋められていたことがわかります。

北壁が一部不明確ですが、一辺約3.5メートルでほぼ正方形に掘られています。6号住居などと同じく浅く掘りこまれており、壁は10センチメートル程度しか認められません。床は、砂や小石の多い土を平らに削つてできており、やや固くしまっています。他の浅い家と同じく、カマドや柱穴などはまったく認められません。

他の小さく浅い家と共通しますが、この家も土器などの道具はもちろん、炭や焼け土などはほとんど発見されませんでした。

小型の土鍋である小型甕の破片のみがごくわずかに出土しています。



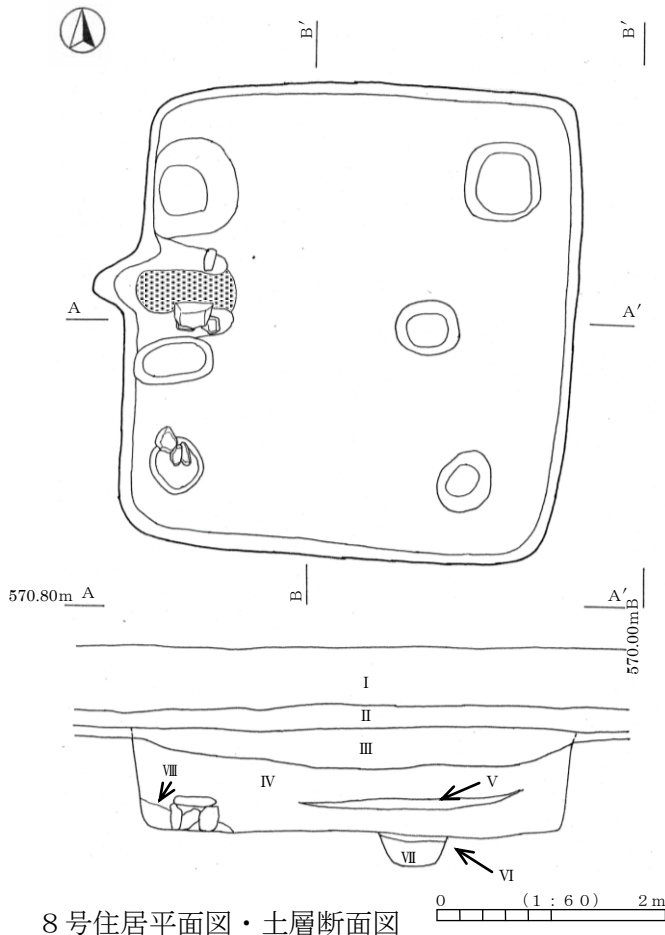
7号住居平面図



7号住居完掘状況

< 8号住居 >

遺跡の一番西側で北側に位置する家として発見されました。北側が用水路があったことから、比較的浅い位置で家の掘りこみが確認できました。その結果、深さ約60センチメートルの壁が落ちこむ位置から土層の観察ができ、家が使われなくなった後どのように土が入ったのかが明らかになりました。家が使われなくなり、まず家の中央部で厚さ20センチメートルほどまで周りの土で埋められます。



そこで、他の家でも行われたように、建築材や屋根材を燃やし、土器などの道具も投げこみました。そして、また中央部で厚さ20センチメートルほど土を埋めています。おそらく家の跡は中央が20～30センチメートルへこんだ状態だったと考えられます。それから、少し時間をかけながら埋まったあるいは埋められて、やがて平らになり水田に利用されていきます。

- I (現耕土)
- II (旧水田耕土)
- III (暗褐色土)
- IV (黄色ブロック混暗褐色土)
- V (黄色土ブロック)
- VI (焼土)
- VII (黄色土ブロック混暗褐色土)
- VIII (黄色ブロック多混褐色土)



8号住居完掘状況

家は一片が3メートルを少し超えるほどの正方形をしています。規模の小さな家ですが、りっぱなカマドを持っており、深くまで掘りこまれているところが、他の家の特徴とちがう点です。家の方向は東西からほんのわずかに南に振れています。床面は中央に向かってやや低くなっていましたが、ほぼ平らにつくられています。

ただし固く踏みしめられたと観察できる部分はあまりありませんでした。床面の四隅に近い所に、直径40～60センチメートルで深さが20～25センチメートルの穴が掘られていました。穴の深さがほぼ一定であることや、中に入っている土が家を埋めていた土とちがうことから、柱穴の可能性が考えられます。しかし、柱の木の跡などは確認できていません。別に、カマドの横と中央東寄りに穴が掘られており、中には焼け土が詰まり完全な形の食器も出てきました。カマドは西壁のほぼ中央に、壁を掘りこんでつくられていました。壁はほぼ垂直になるように掘られていることが観察できました。

カマドは比較的良く残っていて、どのようにつくられていたかがわかる部分があります。特に向かって左側では、細長い角柱の形の石を3個立ててその上に平べったい石を横に置き、周りを粘土で覆ってつくられていることがわかります。右側にも石が芯として使われています。火床は5センチメートルほど掘りくぼめてあり、表面はよく焼けて赤くなっていました。火床の奥は、西壁を丸く掘りこんであり、ほぼ垂直に煙出しができていて煙突に続いていたようすがわかります。

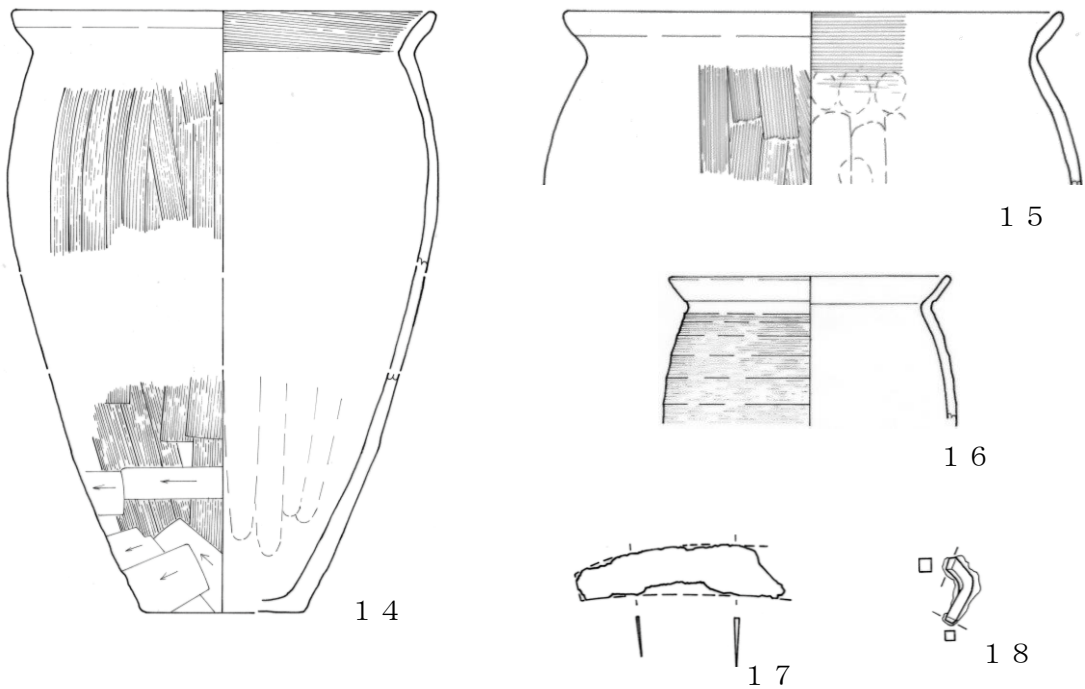
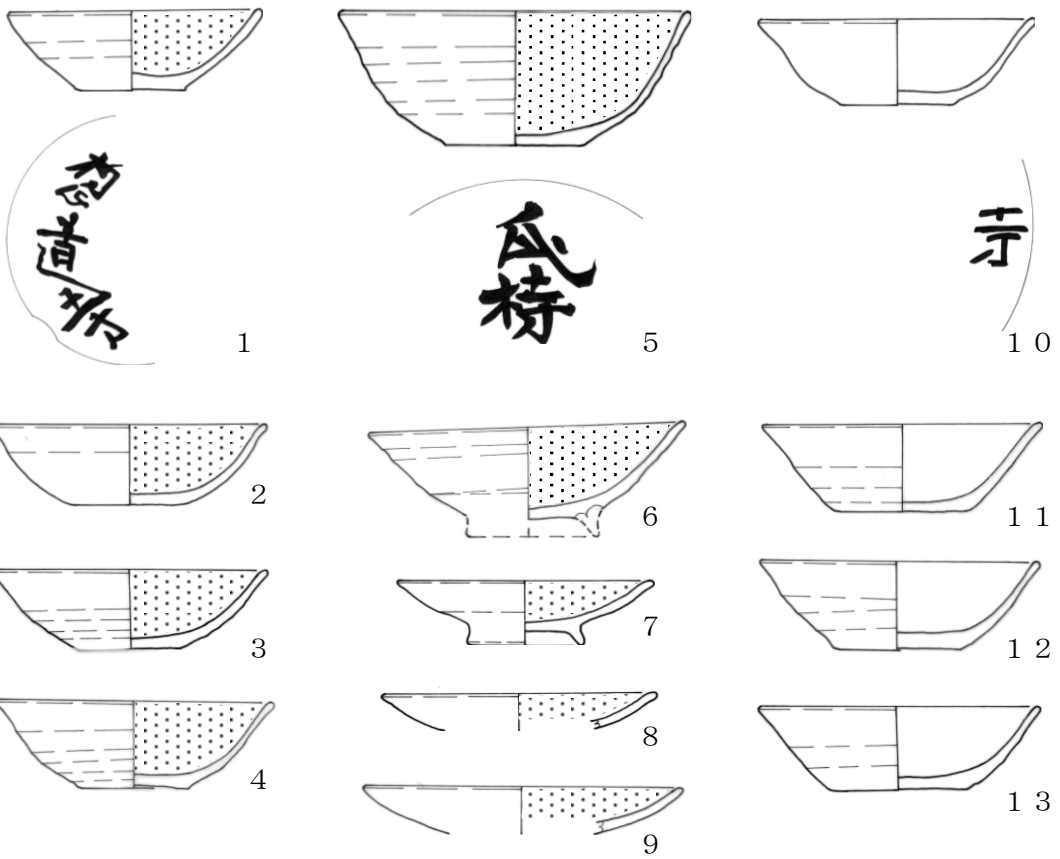
この家は、食器を中心とする道具が特にたくさん残されていました。床に近い位置に、ほぼ完全な形のものが見られるようにありました。カマドの周辺は特に多くの土器などが見られ、カマドの中からはお釜や鍋の役割を果たした大きな土器(甕)が割れるように残されていました。埋められた土にも炭や焼け土と同じ面などで土器片が目立ちましたが、他の家のようにそこに多くがあるということはありませんでした。

見つかった土器は、食器ではお椀が多く、焼き物の種類では黒色土器(1～6)、須恵器(10～13)がありました。皿では、黒色土器(7～9)がありました。土鍋では甕(14・15)や小型のもの(16)がみつかりました。

1・5・10のお椀の外側にはそれぞれ筆を使い墨で文字が書かれていました。1には「○道寺」と書かれ、1文字目は「惣」という文字にも読み取れますがはっきりしません。5には「瓜○」でしょうか、「氏○」でしょうか、一文字目ははっきりしません。2文字目は「寺」の左の部首が「木へん」であり、読めそうで読めません。10には読みにくいですが「寺」という文字が書かれていました。

鉄の製品では、鎌(17)や釘と思われる棒状で割れ口が四角いもの(18)が見つかり、それらを鍛冶で作るときに出る鉄のかすの固まり(鉄滓)が5個(580グラム)が一緒に出てきました。

土器の特徴から、この住居は9世紀(800年代)の中頃(段階1)につくられたものと考えられます。



8号住居出土遺物



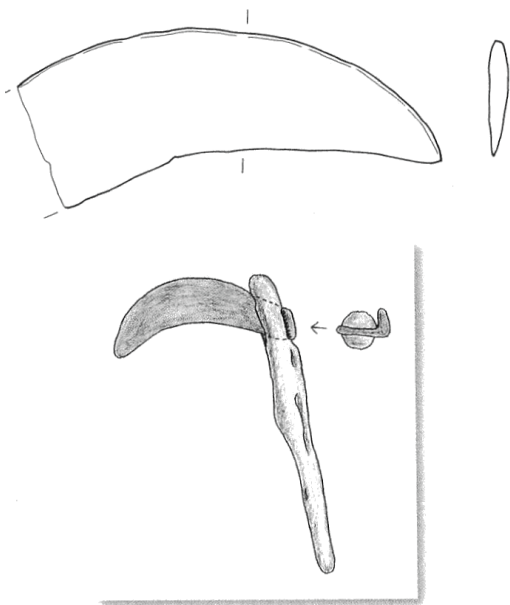
食器類



甕



出土した鎌



鎌：刃の部分<sup>は</sup>を木の棒<sup>は</sup>に挟んで使用した。形は現代のものと似ています。



「寺」の墨書<sup>ほくしよ</sup>のある器

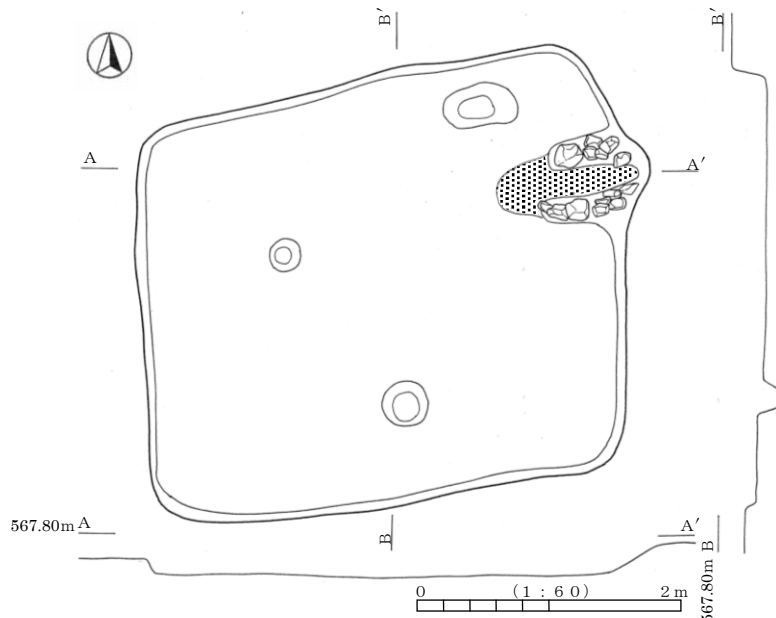
< 9号住居 >

遺跡の西側で南側に位置していて南側の10号住居と重なっています。この地点は土の中に小石が混じっていて土層のちがいが見極めにくく、家の形などを確定するのは難しい作業となりました。発掘調査のなかでは10号住居より新しいと判断しましたが、土器で比べてみると10号住居の方が新しくなります。家の中の土の状態から使われなくなった後埋められていることが明らかになりました。家の方向は東西からやや北を向いています。

家の形は一辺が約3.5メートルと4メートルの長方形を基本としていますが、東壁の北寄りにつくられたカマド付近を外側に張り出すように広げています。小石の多い土の上に平らにつくられた床は、中央部分からカマドにかけて固くしていました。中央に近い場所に2ヶ所穴が掘られていました。直径約30センチメートル深さ20～30センチメートルと柱穴に適した形をしています。位置や数からは柱と考えにくい状況です。壁は10～30センチメートルほどの深さがあります。きちんと垂直に掘りこまれていましたが、南壁の約半分は10号住居を切っており直していると考えました。

カマドは、東壁の北に寄った部分に、壁を大きく掘りこむようにつくられていました。多くの石を組み合わせるようにつくられており、石の間に粘土が残されていました。東側の家で多くみられた、石を芯にする粘土のカマドとは作り方や形がちがっているように考えられます。

完全なかたちのものを含め、土器や陶器の食器がカマド周辺や床面にいくつか残されていました。



9号住居平面図

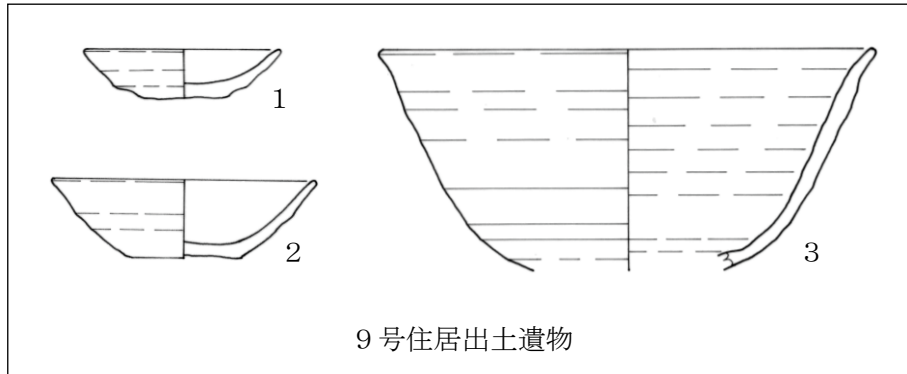


9号住居完掘状況



見つかった土器はほんの少しでした。食器では土師器の椀(1・2)と黒色土器の破片。  
灰釉陶器の鉢(3)などもありました。

土器の特徴から、この住居は11世紀(1000年代)の前半(段階4)につくられたものと考えられます。



9号住居カマド

### <10号住居>

9号住居と重なってつくられており、その南側に位置しています。今度の調査範囲の中でも一番南西に位置しています。9号住居と北壁の大半が重なっていることと調査区の境となったことから、北壁は明らかにすることができませんでした。壁が10センチメートルほどしか残されていないため、明確にはなりません、土の状況からは埋められていると考えられます。家の方向は、ほぼ東西からわずかに北に振れています。

北側の壁がはっきりしませんが、家は一辺4メートルを少し超える規模で、やや北側が広くつくられていた可能性があります。れきの多い土を平らにして床をつくっており、カマド付近は特に固く踏み固められたようがありました。床面に穴などが掘られてはいません。壁は多く残っていませんが、ほぼ垂直に近い角度で掘りこまれていたことがわかります。

カマドは、北東のコーナーの壁を張り出すようにつくられています。両側に5個程度の石を組み合わせていることが確認できました。付近には、その他に非常に多くの石が残されており、多数の石でカマドを設けていた可能性が高いと考えられます。

床面のあちこちに置かれるように土器や陶器の食器が残されていました。カマド付近からも多くの食器が出てきました。



10号住居平面図

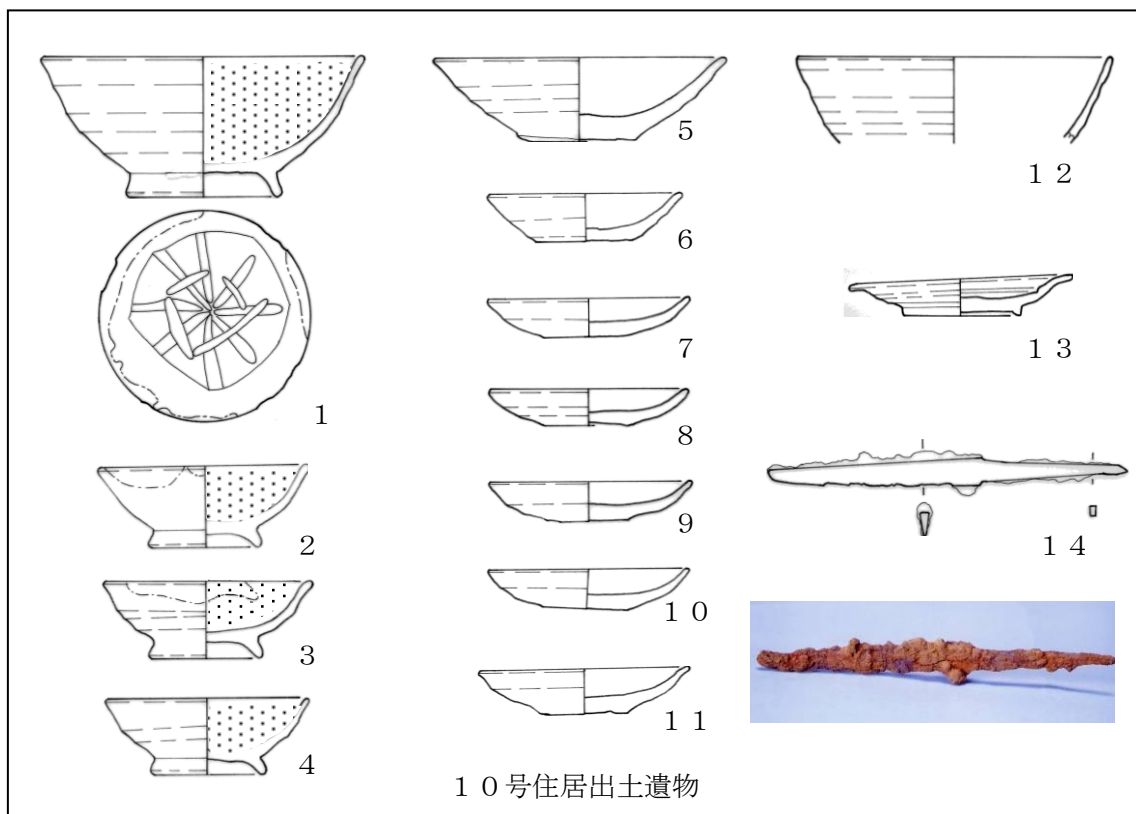


10号住居完掘状況

見つかった土器は、食器のお椀とお皿が多く、大型の椀は黒色土器(1)や土師器(5)・灰釉陶器(12)でつくられ、小型の椀は黒色土器(2~4)でつくられていました。皿では土師器(6~11)や灰釉陶器(13)のものがありました。土鍋は見つかりませんでした。鉄の製品では、小刀(ナイフ、14)が見つかりました。

2・3の小型の椀の縁には油や煤がこびりついていたことから灯明皿(明かり取り)にわかわれていたことがわかりました。また、2の椀の内側には模様がつけられていました。

土器の特徴から、この住居は11世紀(1000年代)の中頃(段階5)につくられたものと考えられます。したがって、9号住居と床面の高さが変わらず新旧をはっきりさせることが難しかったのですが、土器からは10号住居が新しいと判断します。



### < 11号住居 >

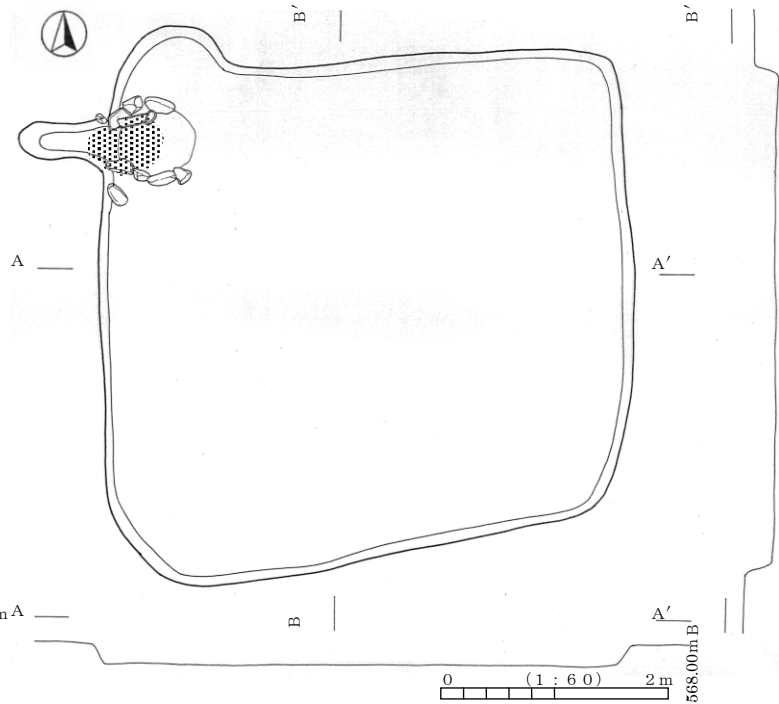
新校舎の基礎工事に合わせての調査の時、7号住居と8号住居の間のやや北側の位置で発見されました。家の中には建築材などの炭化材が多く入る土が埋められていて、土器などもたくさん残されていました。他の家でも見られましたが、家を埋め戻して床面に土がたまったところで、材木を燃やしたり道具を投げ入れたりしています。家の方向は、ほぼ東西方向を向きますがわずかに北に振れています。

家の形は、カマドのつくられている北側がやや広くなっていますが一辺が約4メートルでほぼ正方形をしています。

床はやや凹凸がありますが、中央付近では固くしまっていました。一部で土の上に砂を敷いて床面をつくっているのが観察できました。南西隅に、直径約60センチメートル深さ約30センチメートルの穴が1つ掘られていて、中には焼け土や石といっしょに陶器の壺が入っていました。

カマドは、西壁北寄りの部分に、壁をおおきく掘りこむようにつくられていました。多くの石を組み合わせられており、煙出しが家の外に長く伸びていました。北側の隅が外に張り出しているのも、カマドと関係してされたことでしょう。

家の床にたくさんの土器や陶器が残されていました。完全な形のものも多く、置かれるように残されていました。



11号住居平面図



11号住居完掘状況

見つかった土器は、食器ではお椀が多く、焼き物の種類では黒色土器(1～5)と土師器(11)、灰釉陶器(15)などがあり、小型の黒色土器(6)もありました。15の椀の高台部分にはたくさんのモミの跡が見られました。皿では長い高台のある「盤」とよばれる土師器(7～10)。小皿では土師器(12～14)がありました。土鍋はほとんどなく、小型の甕(16)が見つかっただけでした。貯蔵具では須恵器の壺(17)や灰釉陶器の壺(18)・とっくりのような小さな壺(19)がありました。



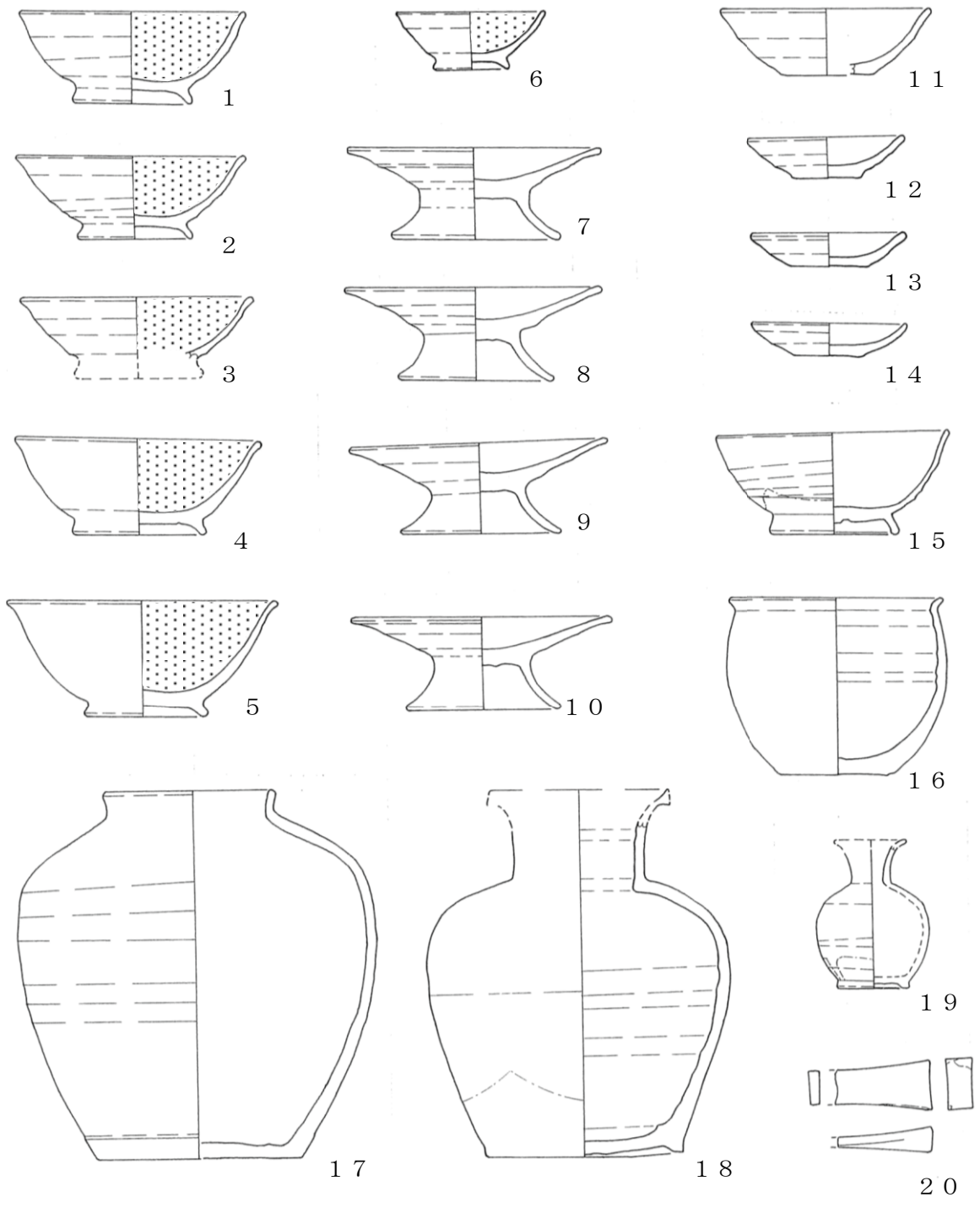
11号住居発掘風景

17番の須恵器という焼き物は、この頃すでにつくられなくなっているもので、100年近くもの長いあいだ大切に使われてきたことがわかります。

そのほかに、今でも鎌などを研ぐ小型の砥石と同じ位の大きさの砥石(20)が見つかりました。

土器の特徴から、この住居は11世紀(1000年代)の中頃(段階4～5)につくられたものと考えられます。





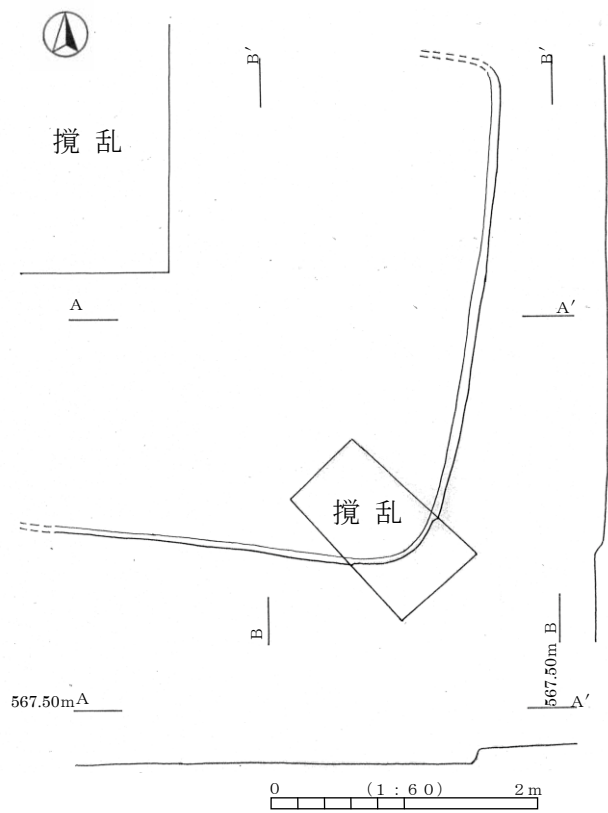
1 1 号住居出土遺物

< 1 2号住居 >

1 1号住居と同じく溝による調査で発見されました。4号住居の北西に接するように位置しています。

しかし、家の南西隅は過去の電柱工事で壊され、北側と東側部分は基礎工事で破壊されてしまうなど、調査の条件は厳しいものでした。

残された部分から一辺3メートルほどの正方形の家が予想されます。家の方向は東西方向からやや南に振れています。浅く掘りこまれており道具などはほとんど残されていません。3号住居や6号住居と似た、小さくてカマドの無い住居と思われます。床面は平らですが固い部分は認められませんでした。西側に砂利が敷きつめられたように残されていました。壁は10センチメートル程度しか残っていませんが、垂直に近く急角度で掘られています。



1 2号住居平面図



1 2号住居完掘状況

< 13号住居 >

11・12号住居と同じく、基礎工事が進む中で溝による調査をしていて発見されました。1・2号住居の北側にあり、遺跡ではもっとも北側に位置する家です。黄色い土に黒っぽい落ち込みとして確認され、一辺が4メートルほどの正方形をしていましたので、家と判断しました。学校の工事に直接関係しないということで、位置だけを確認して埋め戻しました。カマドや床の存在や土器などの道具の発見もありませんので、確実に家とする根拠はありません。また、時期などもはっきりしていません。新しい校舎の玄関付近やその東側には未発見の家がある可能性を、この12号住居が示しています。

< 集中する穴 >

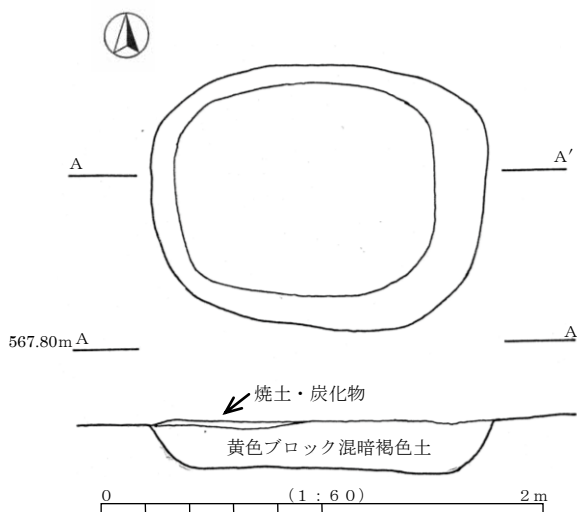
家のつくられた南側に、直径1～2メートルの円形または長円形の穴が13個集まるように掘られていました。深さは30～40センチメートルあります。形や穴の向きは決まっていなくて、建物の柱穴のように規則正しく並んでもいません。穴の中からわずかに出てきた土器の破片から、家がつくられた時期と同じ時に掘られた可能性が高いことがわかりました。

大きさや形からすると、家が営まれた時期のお墓ということも考えられますが、その証拠となるものは発見されませんでした。一つの穴では、上で火を焚いたような焼け土の層がありました。

< 水の流れた跡 >

穴を横切るように、砂や小石の入った溝が南西から北東に伸びていました。家などが確認された層とほぼ同じ面にありました。少し曲がったりはしていますが、巾1メートル足らずで直線的に家の東側に向かっています。深さは20～30センチメートル程度です。

場所によって巾が広くなったりしていることから、水が多く流れたときに溝を壊すように広がった部分があったように観察できました。土器などはまったく発見されず、正確な時期は不明です。



4号土坑（穴）平面図・断面図



土坑（穴）完掘状況



## ムラの生活はどのようなようだったの？

ここまでそれぞれの家のようすを、調査の結果をもとに明らかにしてきました。では、集落(ムラ)を営んだ人々の生活はどのようなようであったのでしょうか？調査でわかってきたことをまとめてみましょう。

現在では、小学校のまわりにはみごとな水田がひろがり多くの家が並んでいます。ところが、今から千年以上前の堀金村から三郷・豊科・梓川の安曇野の南側は、どうやらほとんど家などが無く、深い森の中だったようです。北に遠くの穂高町・明科町方面にはいくつかのムラができていて煙<sup>けむり</sup>などが見えたかもしれません。そこに、突然のように多くのムラができて始めます。村内の岩原・田多井・田尻に同じ時期のムラがあります。南の住吉神社近くの三角原遺跡<sup>いせき</sup>や豊科町吉野の遺跡<sup>いせき</sup>などは、全部このころできてくるムラです。どうやら安曇野の南側は、一気に開発され人の住む地域に変わったようです。

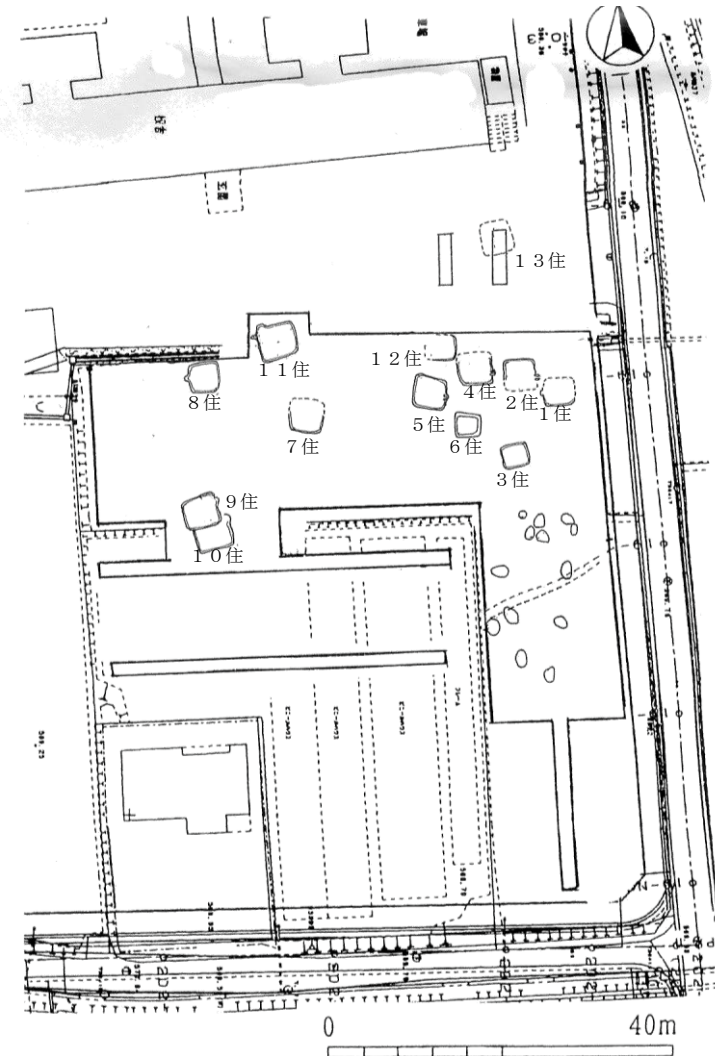
それは、京の都で藤原氏など貴族が活躍<sup>かつやく</sup>する平安時代の初め、9世紀中ごろのことです。どうして、時代がわかるかという、住居の中から土器や道具などが出ていますが、それらの形やつくり方の特徴の変化からいつ頃つくられたものかがたいていわかっているので、出てきた土器などから時代を決めているのです。それから約200年、小学校付近のムラは続いていたと思われます。たぶん、今の堀金村のもとになったムラの誕生です。

今度の調査では、全部で13軒<sup>けん</sup>の家が発見されました。十ヶ堰の東側、岩田天神の所で3軒<sup>けん</sup>の家が見つかっていますので合計16軒となります。しかし、調査されたのはムラのほんの一部と考えられます。それは、小学校から中堀に向かって東にのびる道の両側から、工事をした時たくさん土器などが出たという記録が残っているからです。三郷村三角原遺跡<sup>いせき</sup>では、やはりムラの一部が調査され、60軒近い家が発見されて、おそらくムラ全体では100軒<sup>けん</sup>を大きく上回る家があると考えられています。小学校付近のムラもそれに近い状況<sup>じょうきよう</sup>だったでしょう。ただし、ずっとこの数の家<sup>か</sup>があったわけではありません。ムラが200年も続きますので、何度となく家の建て替えをします。発見された家は、それを合わせた数ですので、同じ時期にあった家はずっと少なくなり何分の一かになるでしょう。

今回調査された家は、このムラの南西隅<sup>すみ</sup>の部分です。同じような規模の家が並ぶように建てられていますが、あまり混み合っていないです。同じようにムラの隅<sup>すみ</sup>の部分が調査されたのが三角原遺跡<sup>いせき</sup>です。小学校付近も北東方向に向けて大きく調査範囲<sup>はんい</sup>が広がれば、多くの家が建ち並ぶようすがわかったと思います。さらに、ムラの有力者が暮らす中心部では、もっと大きな家や緑色の上薬<sup>じょうやく</sup>をかけた陶器<sup>とうき</sup>などが発見される可能性もあります。

同じような規模の家<sup>か</sup>といいましたが、一辺4～5メートルでカマドを持つ家と3メートル程度でカマドを持たない家に分かれます。2号住居と3号住居や4号住居と6号住居のように、大きくてカマドを持つ家と小さくカマドの無い家がセットで建っていたように見える場所があります。豊科町吉野館遺跡<sup>いせき</sup>などでも同じ傾向<sup>けいこう</sup>が見られ、どうしてそうなるのかは、母屋<sup>おもや</sup>と納屋<sup>なや</sup>が組み合わされていたとか使用人が小さな家に住んだとか、いろいろな説明がされていますが結論はでていません。みなさんはどう考えますか？

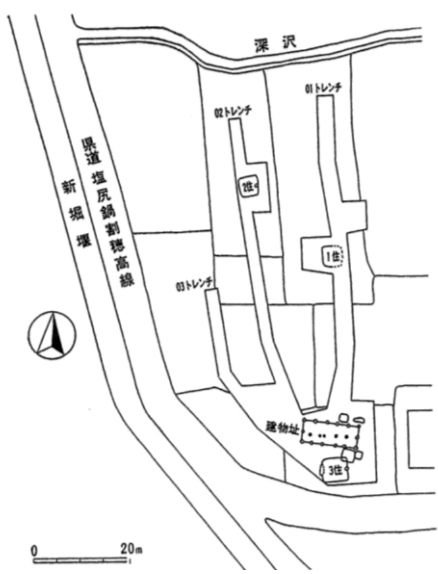
8号住居から『寺』に関係した文字を書いた食器<sup>しょくき</sup>がいくつか発見されました。近くにお寺などの建物がいないか調べてみましたが、関連しそうなものは認められませんでした。すでにこの時代に仏教が地方にまで広まっていたことが分かる資料ですが、今のお寺のよう



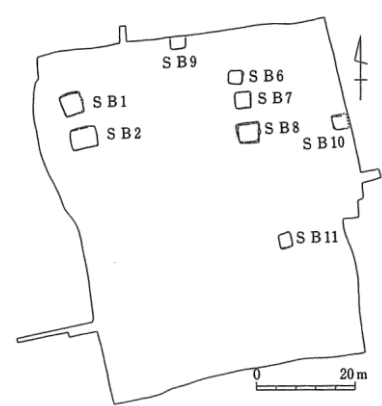
堀金小学校付近遺跡



三角原遺跡



田多井古城下遺跡



吉野町館跡遺跡

堀金小学校付近遺跡と周辺の遺跡の住居配置

な瓦<sup>かわら</sup>をふいたり基壇<sup>きだん</sup>を設けた特別な建物はなかったと思われます。

炭になった木材などが残っていて、家に使われていた木がいくつかはっきりしています。今使われている木とだいたい同じ物が使われています。そして地面を掘りくぼめた土の床は平らに固く踏みしめた後、ヨシ(アシ)のような植物を敷きつめたことが、やはり出てきた炭からわかります。また、8号住居の床には隅に4ヶ所柱穴が見つかり、4本の主な柱に支えられた屋根が想像できます。しかし、その他の家が具体的にどのように建てられていたのかは、調査のなかでは明らかになりませんでした。

使われていた道具からも生活のようすがわかります。家が使われなくなった時、道具は次へ持って行かれたり片づけられたりしますので、実際の種類や数は明確にならない場合が多いのです。ところが、11号住居からは、使われていた食器類がある程度そのまま残って発見されました。碗<sup>わん</sup>と皿<sup>ひら</sup>が15個、鍋<sup>なべ</sup>や釜<sup>かま</sup>が1個、壺<sup>つぼ</sup>が3個となります。例えば一家4人と考えると、一人あたりの茶碗<sup>ちやわん</sup>・皿<sup>ひら</sup>の数もだいたい想像がつかますね。ただし、この他に木で作った器や竹で編んだ籠<sup>かご</sup>などがあつたでしょうから、もっといろいろな道具が数多く使われていたのでしょう。何を食べていたのかは、食物がくさりやすい物であることから、今回の調査ではよくわかりません。ただし、茶碗<sup>ちやわん</sup>のような焼き物のしたに、稲<sup>いね</sup>の粃<sup>もみ</sup>痕<sup>あと</sup>が残されていましたので、稲作をして米を食べていたことは確かでしょう。

その他の道具としては、鉄で作った、鎌<sup>かま</sup>や小刀(ナイフのような道具)と釘<sup>くぎ</sup>が出てきます。他の遺跡<sup>いせき</sup>では、鋤<sup>すき</sup>・鍬<sup>くわ</sup>やカンナなども出ていて、ほとんどの道具が鉄に変わっていることがわかります。さらに、鉄の道具を研ぐ砥石<sup>といし</sup>も出ています。今回は出てきませんでしたが、三郷村三角原遺跡<sup>いせき</sup>では、矢の先につけた鉄鏃<sup>てつぞく</sup>が出ています。農民ではあっても武器を持って自分たちを守っていたと考えられます。土師器<sup>はじき</sup>や須恵器<sup>すえき</sup>に字が書いてあつたことは説明しましたが、道具として筆<sup>すみ</sup>・墨<sup>すずり</sup>・硯<sup>すずり</sup>があつたことがわかります。もちろん、字を学んで読んだり書いたりできる人がムラにいたのです。



住居跡から出土した木材の炭

以上、住む家と食べることを中心とした道具について説明しました。次に、衣類・着物についてですが、それに関係した物はまったく発見されませんでした。これもおとなりの三角原遺跡から出てきた物ですが、植物の麻から糸にしていく時に使った鉄の道具が見つかっています。麻布の服を着ていたことが想像できます。貴族が身につけていた十二単などの豪華な着物とは比較になりませんが、寒さや暑さを防ぐ服を身にまとい履き物を履いていたことでしょう。

ムラの南側から1～2メートルの長丸の形をした穴が15個ほどまとまって発見されています。位置や形からはお墓の可能性がありますが。他の遺跡の例では、木で棺をこしらえ、その人が生前大事にしていた道具(特に食器)を供え物として入れて、ていねいに葬っています。しかし、供え物を持たないお墓もありますし、骨も長い時間で残りにくくなっていますので、お墓かどうかは確認が難しいのです。ムラはずれに掘られた穴が何に使われたのか、明らかにすることはできません。

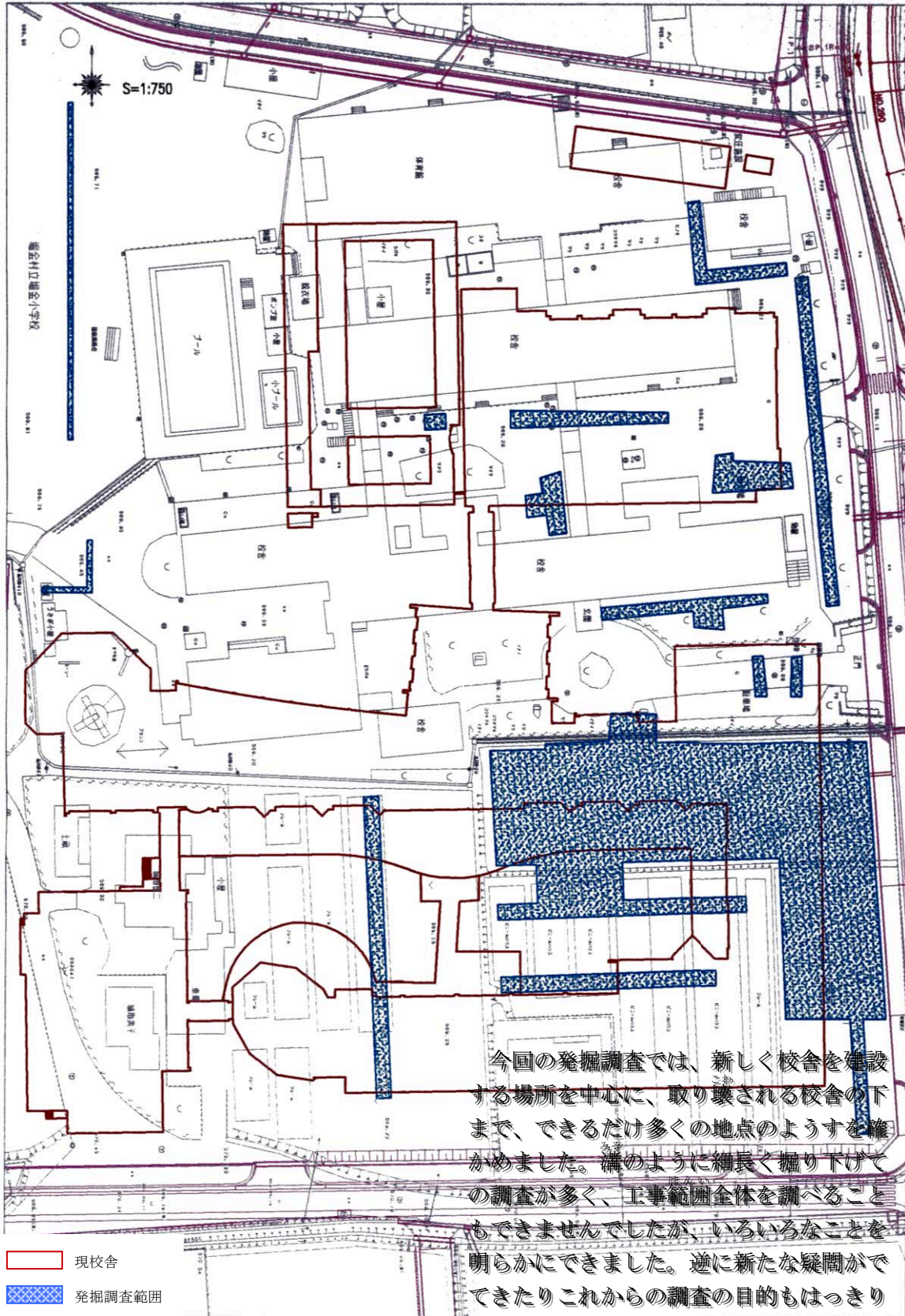
穴の集まりを横断するように、1本の水の流があつたようです。幅・深さともに数十センチメートル以内で、南西から北東方向に直線的に流れています。これは人の手で作られた用水路を強く感じさせ、上流は田多井方面から流れてくる深沢などの沢水につながっていたでしょう。三郷三角原遺跡でも同じような用水路の存在が知られており、ムラ的生活用水や水田への水がかりとして、このような用水路が何本も掘られていたものと考えられます。

堀金小学校付近に営まれたムラの家は、9世紀中ごろから11世紀まで約200年間の幅があります。ムラのごく一部を調査しただけですので、この200年間ずっと営まれ続けたかどうかは明らかになっていません。ただし、南に位置する三角原遺跡がまったく同じ時期の集落であることは、注目される事実です。同時に計画的に開発された集落群とするならば、おそらくお互いに連絡や助け合いがされていたでしょう。そうすると、200年近く続いたムラとなり、相当有力なムラの一つとして繁栄したのでしょう。現在の堀金村のもとを形づくった大事なムラが小学校付近に眠っているのです。



遺跡から出土した鉄器や砥石など

### 第3章 調査の成果と問題点



発掘調査全体図

今回の発掘調査では、新しく校舎を建設する場所を中心に、取り壊される校舎の下まで、できるだけ多くの地点のようすを確かめました。溝のように細長く掘り下げた調査が多く、工事範囲全体を調べることもできませんでしたが、いろいろなことを明らかにできました。逆に新たな疑問ができてきたりこれからの調査の目的もはっきりしてきました。

## 調査をしてどんなことがわかったの？

今回の発掘調査は、決して十分な体制や内容で実施されてはいません。それは、工事の進められた場所が、これまで遺跡として考えられている範囲ではなかったことに大きな原因があります。東で確かめられている遺跡に近いということから、念のために確かめの調査をしたところ遺跡があることが明らかになったのです。すでに建設計画が確定し工事の開始時期が決まっているなかでの調査となりました。それとともに、調査を主な担当者が他に仕事などをかかえていて休日などを利用しての調査に限定せざるをえなかったこと、現在の校舎を取り壊した後同じ場所に立て替えをする工事が多いことなど、悪条件がいくつも重なりました。何より、児童のみなさんが工事の騒音や暑さなどをがまんしながら学習を続け、6年生が卒業までに新校舎で生活することを楽しみにしているという学校建設に関係した調査であったことが、他の発掘調査とちがう配慮を必要としました。その結果、調査の方法や記録の取り方などが限られ、不十分な部分も生じましたが、調査で得られた成果をできる限り具体的かつ簡潔にまとめてみました。

成果の第1は、この一帯に存在が予想されていた古代(奈良・平安時代)のムラ(集落)が、部分的ではあるものの具体的にとらえられたことです。幸いにして、同じ時期に三郷村三角原遺跡でも発掘調査が進められました。そして、同じ時代によく似たムラが並ぶように営まれていたことがわかり、ムラを理解するうえで参考になりました。ムラのはずれと思われる場所には、比較的規模の小さな家が方向を合わせるように建ち並び、何世代も受け継がれていくようすが明らかになりました。今まで、安曇野南部の古代集落は、集落全体のようにほとんどわかっていなかったもので、それを理解する大きな手がかりとなりました。

第2は、それまでほとんど集落が営まれなかったこの地域に、平安時代の初期にいったいに開発が進められるようすが明らかになったことです。しかも、これまで短い期間営まれる集落しか確認されていなかったのに、200年程度継続する集落として本遺跡と三角原遺跡の存在が確認されたことが大きい成果です。松本に国府(県庁)が置かれるようになって後の安曇野がどのように開発されたのか、だれが開発を進めたのか、いろいろな集落の移り変わりを通して追究できそうです。また、鎌倉時代の文書に出てくる住吉庄との関係で、11世紀まで継続する集落が明らかになったことは注目されます。

第3に、山すその岩原・田多井などと同じ時期に、平地部分の上堀にかなり規模の大きなムラ(集落)が営まれていることがわかりました。田尻や下堀でもほぼ同じ時期の土器などが拾われており、堀金村における現在の集落の原型が今から千年ほど前にできつつあったことが確実になりました。

8号住居から『寺』に関係した文字などが書かれている食器が発見されました。当時すでに仏教が広まっていたことが判明するとともに、小学校の場所で相当古い時期から存在していたことが知られている『小林寺』との関係が注目されます。また、2文字あるいは3文字で書かれた文字の意味が注目されます。

土器や陶器が豊富に発見され、松本市の遺跡で確認されている時期別の変化とほぼ一致することが明らかになりました。おとなりの三角原遺跡でも多くの焼き物類が発掘されていて、土器類が年代を決める資料「時代のものさし」としてより正確に使うことができるようになりつつあります。

## まだわからないことや新たな疑問には何があるの？

これから明らかにしていかなければならない一番大きな問題点は、今回調査された範囲<sup>はんい</sup>の東側、役場や体育館のある方向に向かって、ムラがどのように広がっているかです。発掘調査全体図で示したように、旧校舎の下や校庭にも何か所か溝<sup>みぞ</sup>を掘ってムラがそちらにもあるか確かめました。旧校舎のまん中あたりまでムラが広がっている可能性があることは明らかになりました。その結果から、今回調査された場所は、ムラの南西の隅<sup>すみ</sup>だと考えられます。十ヶ堰より東では、多くの道具が発見されているだけでなく、緑色の上薬をかけた陶器<sup>とうき</sup>が出土し、そこにムラの中心地がある可能性が高いのです。今後東側の調査が進み、ムラの全体のようなすが明確になることで、平安時代に開発が始まった安曇野の集落が具体的にどうであったかがわかるでしょう。さらに、どんな人たちがどんな方法で開発をしたかという、大きく当時の日本や信濃の国の歴史に関係する内容を明らかにすることにつながります。

次は、このムラの人たちは何で生計を立てていたかという点です。用水路から水田を耕作していた可能性は指摘<sup>してき</sup>できますが、ムラのまわりのようすは明らかになっていません。また、鉄の道具をつくる鍛冶屋<sup>かじや</sup>さんをしていたこともわかり、田多井から小田多井にかけては牧場に関係する地名の存在などが知られていますが、生活を営む手段に関係したことを調査していくことが必要となります。

ムラは200年ほど営まれたのち、平安時代の後半11世紀には姿を消します。その後どうなっていたのかはまったくわかっていません。鎌倉時代以後、住吉庄が栄えたことが文書に見えていることは述べましたが、穂高町付近には矢原庄が長く続いています。その中間に位置する堀金の地はどうであったのか、周りのムラのようすを明らかにしながら追究していくこととなります。



11号住居出土灰釉陶器

『寺』に関係した文字が書かれています。文字の意味や仏教・寺がムラにどのように取り入れられていたのかを具体的にしていかなければなりません。それには、ムラの西側に位置する小学校校庭の方向を調査していくことです。

使われている道具についても、他のムラなどと比べながら、その特徴<sup>とくちょう</sup>や使われ方をさらにはっきりさせねばなりません。特に『時期を決めるものさし』のはたらきをする土器<sup>どくわ</sup>や陶器<sup>とうき</sup>を細かく研究する必要があります。

このように、明らかになったことも多い反面まだこれから考えていかなければならない疑問も数多く出てきているのです。

## 第4章 調査の経過

### どうして調査をするようになったの？

堀金小学校の東側には、岩田天神南遺跡<sup>いわたてんじんみなみいせき</sup>とよばれた平安時代のムラ(集落)の一部が発掘調査されたことがあります。また、水田の区画整理をした時、たくさん土器などが出てきて、この付近はかなり規模の大きなムラではないかと予想されていました。しかし、十ヶ堰をはさんだ西側の小学校の下にまでムラが広がっているのかは、調査などがされてこなかったことから明らかではありませんでした。

今回、堀金小学校が改築され新しい校舎を建てる工事をするにあたって、ムラがどの範囲<sup>はんい</sup>にまで広がっているのか、まず試し掘りをする事となったのです。その結果、新校舎を建築する部分を中心にムラが西側に広がっていることがはっきりしました。

教育委員会では、下に遺跡<sup>いせき</sup>がある時は工事に先立って調査などを実施し遺跡を保護しなければならないという法律にしたがって、発掘調査を行うことにしたのです。校舎を建てることで、遺跡は校舎の下になってしまいますが、村のようすや人々の生活の姿は記録として残されたのです。

### 発掘にいたるまでの経過

平成 13 年 2 月 21 日

小学校建設研究委員会答申により現地での建設が決まりました。

平成 14 年 4 月 用地買収を開始

平成 15 年 3 月 用地買収を終了

平成 15 年 5 月 22 日

文化財関係者会議を開催<sup>かいさい</sup>

遺跡指定ではありませんが、岩田天神南遺跡<sup>いわたてんじんみなみいせき</sup>に隣接<sup>りんせつ</sup>していることから工事の前に遺跡があるか試掘調査<sup>しきくさ</sup>に入ることを決定しました。

平成 15 年 8 月 28 日 遺跡発掘の届出書を提出  
<調査の経過>

工事の進行ぐあいによってそれぞれの場所を調査しました。

平成 16 年 7 月 7 日 文化財発掘調査





平成 16 年 8 月 4～5 日	文化財発掘調査
平成 16 年 8 月 6 日	文化財発掘調査
平成 16 年 10 月 24 日	文化財発掘調査
平成 16 年 11 月 7 日	文化財発掘調査
平成 16 年 12 月 18 日	文化財発掘調査
平成 17 年 4 月 15 日	文化財発掘調査
平成 17 年 4 月 16 日	文化財発掘調査

## 調査体制

### ・事務局

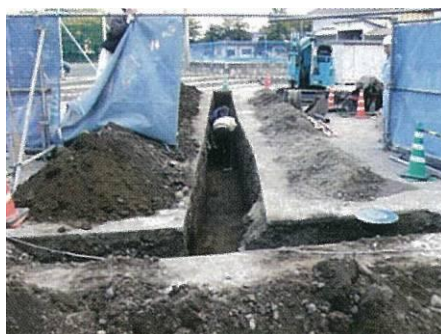
事務局長	小平信夫	(教育長)
事務局	古幡 昇	(元教育次長)
	一志信一郎	(教育次長)
	臼井 基	(学校建設係長)
	宮澤英昭	(学校建設主任)

### ・調査員

山田瑞穂 百瀬新治 寺島俊郎

### ・作業員

丸山富士雄 宮下一男 山口裕  
 竹内満寿美 伊藤俊夫 坪田美弘  
 黒岩淑人 丸山多喜男 横山宗義  
 宮坂保 宮澤幸子 矢淵寛明  
 中田朋巳 立岩浩 唐沢和樹  
 平倉秀一 板花耕治 曾山裕之  
 大沢淳 米倉秀政 山本恭啓  
 竹岡江一 中沢秀三郎 松沢章  
 松沢直行 城取信久 大蔵邦之  
 中村英子 百瀬栄二 高橋秀行  
 小平信夫 古旗昇 一志信一郎  
 臼井基 宮澤英昭 高橋よし恵  
 宮澤裕二 一志朋江



## 調査の経過

### ・第1次調査

平成 15 年 9 月 4 日(木)晴れ

遺跡発掘調査開始 重機によるトレンチ作業

2箇所 排土 調査 掘り下げ作業

調査員 百瀬新治 山田瑞穂

作業員 丸山富士雄ほか 14 名

平成 15 年 9 月 5 日(金)晴れ

掘り下げ作業 排土 調査  
調査員 百瀬新治 寺島俊郎  
作業員 山口広洋ほか 11 名



平成 15 年 9 月 6 日(土)晴れ

掘り下げ作業 調査  
調査員 百瀬新治 寺島俊郎 森義直  
作業員 黒岩淑人ほか 11 名

平成 15 年 9 月 7 日(日)晴れ

掘り下げ作業 調査  
調査員 百瀬新治 寺島俊郎  
作業員 横山宗義他 11 名

平成 15 年 9 月 14 日(日)晴れ

測量作業 全体図作成  
調査員 百瀬新治 山田瑞穂 寺島俊郎  
作業員 古幡昇ほか 2 名



・第 2 次調査

平成 15 年 11 月 21 日(金)曇り

重機によるトレンチ作業 3箇所  
掘り下げ作業 調査  
調査員 百瀬新治 山田瑞穂  
作業員 丸山富士雄ほか 8 名



平成 15 年 11 月 22 日(土)曇り

掘り下げ作業 調査 作業終了 図面作成  
調査員 百瀬新治 寺島俊郎  
作業員 宮澤幸子ほか 13 名

平成 15 年 11 月 24 日(月)晴れ

調査結果説明会  
調査員 百瀬新治 寺島俊郎  
作業員 臼井基ほか 3 名 参加者 40 名

・第 3 次調査

平成 16 年 7 月 7 日(水)晴れ

重機によるトレンチ作業 3箇所 調査  
掘り下げ作業 調査  
調査員 百瀬新治 寺島俊郎  
作業員 小平信夫ほか 5 名



平成 16 年 8 月 4~5 日(水~木)晴れ

重機によるトレンチ作業 1箇所 調査  
調査員 百瀬新治

作業員 一志信一郎ほか 2 名  
 平成 16 年 8 月 6 日(金)晴れ  
 重機によるトレンチ作業 1箇所 調査  
 調査員 百瀬新治  
 作業員 白井基ほか 1 名  
 平成 16 年 10 月 24 日(日)晴れ  
 重機によるトレンチ作業 1箇所 調査  
 調査員 百瀬新治  
 作業員 一志信一郎ほか 5 名  
 平成 16 年 11 月 7 日(日)晴れ  
 重機によるトレンチ作業 1箇所 調査  
 調査員 百瀬新治  
 作業員 一志信一郎ほか 2 名  
 平成 16 年 12 月 18 日(土)晴れ  
 重機によるトレンチ作業 2箇所 調査  
 調査員 百瀬新治 山田瑞穂 寺島俊郎  
 作業員 小平教育長ほか 3 名  
 平成 17 年 4 月 15 日(金)晴れ  
 重機によるトレンチ作業 2箇所 調査  
 調査員 寺島俊郎  
 作業員 小平教育長ほか 3 名  
 平成 17 年 4 月 16 日(土)晴れ  
 重機によるトレンチ作業 2箇所 調査  
 調査員 百瀬新治 寺島俊郎  
 作業員 小平教育長ほか 3 名  
  
 平成 16 年 9 月より  
 遺物整理  
 調査員 百瀬新治 寺島俊郎  
 平成 17 年 4 月より  
 図面整理 報告書・原稿作成  
 調査員 百瀬新治 寺島俊郎  
 平成 17 年 8 月 15 日より  
 報告書作成  
 調査員 百瀬新治 寺島俊郎  
 平成 17 年 8 月 27 日  
 写真撮影 中沢義直  
 調査員 百瀬新治 寺島俊郎  
 作業員 一志信一郎ほか 7 名



## 堀金小学校付近遺跡はこれからどうなるの？

1000年の眠りからさめた小学校の下のムラは、調査の後再び埋め戻されて学校の下に姿を消しました。また、発見された家のほとんどは工事により壊されて、二度と見るこのできない状態になっています。この場所に平安時代から生活が営まれていたことが新しくわかったことと引き替えに、汗を流して生き抜いてきた人たちの残した文化財が学校建設の犠牲になったともいえます。

ただし、ムラの中心部を含む遺跡の大部分は、十ヶ堰をはさんでの東側の水田の下に残されているものと思われます。かつての水田区画整理の工事(圃場整備事業)で、かなり壊されていますが、住居の跡などは現在の水田より1メートル以上深い位置にあると考えられていますので、まだ残されている部分が多いのです。今後、この部分を調査することで、ムラのように十分を知ることができます。このことから、小学校の東側水田地帯は、できるだけ今のままで残し今の堀金の原点ともいえるムラを大切に将来に伝えていくことが重要です。できれば避けたいのですが、もし、どうしても工事などをしなければならなくなった時は、ていねいで正確な発掘調査と記録に残すことを、大事な遺跡に手をつける替わりとして実施しなくてはなりません。最優先で考えていきたいことは、安曇野の風景としても貴重な広々とした水田の続く今を、小学校の周辺としてすばらしい環境を、みんなで大事に守っていくことです。

この報告書は、小学校の下のムラがどのようなものであったのかを、村のみなさんに知っていただくことに力点を置きました。堀金小学校付近遺跡の将来はどのようなのか？それを決めるのは、村のみなさん自身だからです。遺跡を正確に知っていただき、自分たちが今ここで生きていることと直接関係するその価値を理解していただくことが、これから遺跡がどのようなのかを決める際の決定的に重要なことになると考えます。

さらに、かつてお寺があった場所の小学校の西側から戦国時代の館跡とされる堀屋敷のある北側を含め、大きく範囲を広げて遺跡との関係を調査することや、現在の水田と上堀・田尻集落になるまでの歴史的な変遷を、総合的に調査することもしなければなりません。その活動が進展するなかで、特に堀金小学校のみなさんが、自分たちの学ぶ学校の周りの地域の歴史や文化を具体的に知ることができ、大事な文化財の守り手となっていってくれるものと確信します。



完成が近い新校舎

堀金小学校付近遺跡がこの先どうなるかという大きな課題は、この報告書によってかつてのムラのことを知っていただいたみなさんといっしょに考えさせてください。そのことを最後にお願いいたします。

## 報告書抄録

ふりがな	ほりがねむらのまいぞうぶんかざいだい2しゅうほりがねしょうがっこうふきんいせき							
書名	堀金村の埋蔵文化財第2集堀金小学校付近遺跡							
副書名								
編著者名	百瀬新治、寺島俊郎、山田瑞穂、小平信夫、一志信一郎、臼井基、宮澤英昭							
編集機関	堀金村教育委員会							
所在地	〒399-8211 長野県南安曇郡堀金村大字烏川2753-1 TEL0263-72-5796 FAX0263-72-5801							
発行年月日	平成17年9月30日							
ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ほりがねしょうがっこう 堀金小学校 付近遺跡	長野県 南安曇郡 堀金村 3000	204676	24	36度 17分 23秒	137度 52分 26秒	2003.09.04 ～ 2005.04.16	2,200 m <sup>2</sup>	堀金小学校校舎 改築に伴う発掘 調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
堀金小学校 付近遺跡	集落跡	平安時代		竪穴住居跡 13 土杭 17 自然流路 1		平安時代土師 器 須恵器 灰釉陶器 鉄器	平安時代前半から後半にか けての集落跡の一角。安曇郡 及び住吉庄の開発などが具 体的ににわかる村落様相の 手がかりとなる調査。 東側に主要部分を含む集落 の大部分が残る。	

### 堀金村の埋蔵文化財第2集

長野県南安曇郡堀金村 堀金小学校付近遺跡  
—小学校の下に埋れていた平安時代のムラー

発行日 平成17年9月30日

発行 堀金村教育委員会

〒399-8211 長野県南安曇郡堀金村大字烏川 2753-1

TEL0263-72-5796 FAX0263-72-5801

印刷 有限会社 大気堂印刷

〒399-8205 長野県南安曇郡豊科町豊科 2572

TEL0263-72-2425 FAX0263-72-8151



11号住居出土須恵器

2005



長野県南安曇郡堀金村教育委員会